

安部公房の読者のための通信 世界を变形させよう、生きて、生き抜くために！



月刊 もぐら通信

Mole Gazette for Kobo Abe's Readers

2013年2月28日

第6号

<http://abekobosplace.blogspot.jp>

あなたへ：
迷う事のない迷路を
あなただけの番地に届きます

このもぐら通信を自由にあなたの「友達」に配付して下さい



目次

1. お知らせ... page 2
2. 安部公房に缶切りを！-安部ねり & 加藤弘一トークライブ報告：
ホッタカシ... page 3
3. 『友達』公演までの道のり：
奥村飛鳥... page 8
4. 戯曲『友達』稽古場訪問記
編集部岩田英哉... page 16
5. 現実生活にあらわれる「安部公房現象」について：
滝口健一郎... page 21
6. 安部公房短編集に見る愛の思想：
OKADA HIROSHI... page 22
7. 「デンドロカカリヤ」の引用の深み：
富士原大樹... page 28
8. 安部公房一技術と芸術が再会する
場所：wllallen... page 31
9. 貼りついた未来の皮膚：
竹知佑輔... page 33
10. TAP(東京・安部公房・パーティ)
ミーティング報告：しめじ... page 36
11. 安部公房に捧げる歌：
睡蓮... page 40
12. もぐら感覚：笑い：
タクランケ... page 42
13. 安部公房の变形能力4：リルケ1
岩田英哉... page 49
14. 安部公房の詩を読む2：
贗岩田英哉... page 58
15. 「もぐら通信」を読んで：
ロータス... page 65
16. 読者感想... page 68
17. 合評会... page 70
18. 主な献呈送付先・ご感想... page 70
19. 編集方針... page 70
20. バックナンバー... page 70
21. 編集者短信... page 71
22. 編集後記... last page
23. 次号予告... last page

2月20日新宿紀伊国屋ふらっとすぽっとにて安部ねりさん&加藤弘一さんのライブトークが東京新宿南口の紀伊国屋書店3階のイベントスペースふらっとすぽっとにて、同日19:00より、super wakuwaku live talkの一環として、近藤一弥さんの司会にて、安部公房の最新刊『(霊媒の話より)題未定-安部公房初期短編集-』(新潮社)を巡って、安部ねりさんと加藤弘一さんのライブトークが開催されました。当日の様子は、今号でホッタカシさんがレポートして下さいました。是非お読み下さい。

二つの「友達」が競演

ひとつは、東京新宿サニーサイドシアターにて、2月27日(水)より3月3日(日)まで。演出は、坂田俊二。出演は、山本啓介、原田達也ほか。 : <http://www8.ocn.ne.jp/~sunnyway/>

もうひとつは、東京高円寺明石スタジオにて、3月7日(木)より3月10日(日)まで。演出は、水下さよし。出演は、飯田謙、奥村飛鳥ほか。今月号の編集部の稽古場見学のレポートをご覧ください。 : http://www.engeki.org/2013/02/post_1847.html、または Facebook : <https://www.facebook.com/FeyOffice>

お知らせ

3月に関西と関東で読書会を開催します！

関西と関東で、安部公房ファンのための読書会が同じ3月に開催されます。ふるってご参加下さい。

関西安部公房オフ会

- 日時：3月2日（土）午後1時～5時
- ・開場：12時50分
- ・場所：京都市右京ふれあい文化会館
第三会議室 (<http://www.kyoto-ongeibun.jp/ukyo/map.php>)
- ・課題本：『燃えつきた地図』
- ・司会：岩田英哉（タクランケ）
- ・定員：18名
- ・参加費用：200～400円です。
- ・懇親会：終了後、前回と同じ花園の「王将」にて懇親会を開きます（参加費用別途）。
- ・告知：<http://wlallen.seesaa.net/article/316273713.html>、または
<http://textream.yahoo.co.jp/message/1000004/0bit8xkbc?comment=747>

- ・参加の申込方法：Twitterで@hirokd267宛にツイートまたはRT(リツイート)で「参加申し込み」と書いてください。

東京・安部公房・パーティー（TAP）

- ・日時：3月9日（土）
- ・場所：荻窪ベルベットサン (<http://www.velvetsun.jp>)
- ・課題本：『燃えつきた地図』
- ・料金：入場料1000円+1ドリンク500円
- ・開場：16:30
- ・開始：17:00
- ・懇親会：終了後、荻窪駅周辺の居酒屋にて懇親会を開きます（参加費別途）。
- ・参加の申込方法：しめじさん宛に次のところから：http://mixi.jp/view_community.pl?id=778431

旭川で「安部公房作品朗読会」を開催予定

安部公房ゆかりの地・北海道旭川市の東鷹栖公民館で、3月16日午後2時より「安部公房作品朗読会」が開かれます。

講師は袖山基子さん（旭川リーディングクラブ）ほか

安部公房に缶切りを！

～安部ねり & 加藤弘一 トークライブ報告～

2013年2月20日紀伊國屋書店新宿南店

ホッタタカシ

『(霊媒の話より) 題未定』出版を記念しての、安部ねりさん & 加藤弘一さんのトークライブが、2月20日夜、紀伊國屋書店南店3Fの「ふらっとすぽっと」で開催された。本来ならば、このトークライブ報告は、本誌編集部の岩田英哉さんが担当するはずだったものだが、急病とのこと。「後を頼みます」と病床の岩田氏から悲壮感あふれる連絡を受け、不肖私がおっとり刀で駆けつけた次第。

スタート15分前に到着すれば、「ふらっとすぽっと」は本当にちんまりしたスペースで、用意された客席は20席にも満たない。そのおよそ半分にお客さんが着席済みだった。やれやれ間に合った、と最前列のかぶりつきに腰を下ろす。するとその後わずか10分足らずの間に席はみるみる埋まってしまう。店員さんがあわてて追加の丸椅子を用意したもののとても間に合わず、開始時間を過ぎるころには40人近い人ばかりが3Fの一角を埋め尽くさんとするほどにふくれあがった。安部公房人気、健在なり！

やがて黒の上下に身を包んだ安部ねりさんと、あったかそうなセーターを着た加藤弘一さんが登場。司会進行は『(霊媒の話より) 題未定』の装釘を担当したデザイナー・近藤一弥さん。近藤さんがお二人を紹介し、トークは始まった。

まずは『天使』の発見状況について。安部公房の弟・井村春光氏の家から見つけたもので、同時に公房からの書簡も少し発見されているそうだ。近藤さんは展開するトークテーマに合わせて、パソコンから幼少期の安部やかつての家族写真などの資料画像を、背景のスクリーンに投影してくれていたのだが、この時は発見された書簡の一部が映し出された。

公房・春光兄弟はとても仲が良く、春光は5歳で母・ヨリミの実家へ養子に出されるが、この時、8歳の公房は非常にさびしい思いをした、と語るねりさん。「小説の処女作である『(霊媒の話より) 題未定』の主人公、パー公の孤独感というのは、すごく弟を思う公房の気持が出ていると思うんです。また、あれは当時の家族とその周辺の人物がモデルじゃないかとうかがわせるキャラク

ターが多くて、肉親としてはそのあたりも楽しいですね」

ねりさんによると『（霊媒の話より）題未定』の原稿はきちんと保存されていたそうだ。

「父は死後発表されることを見越していたのかもしれませんが」

すると加藤さんも、

「『（霊媒の話より）題未定』は東京で書き、満州へ持って行ってまた持ち帰っているんですね。そんなに大事にしたということは、発表の意志はあったんじゃないかな。生きてるうちは出したくなかったのかもしれない」

と、うなづく。ねりさんは続けて、

「初読の印象では『罪と罰』を書き直したのかな、と思ったんです。ドストエフスキーは個人の罪と社会の罰について書いたんだけど、パー公は罪の意識も罰の意識も内面に持っている。まあ、父は三島由紀夫と『作家ってのは影響を受けた作品を自分の中でずっと書き直し続けているものなんだ、他の人はまずわかんないだろうけどね』と言っていたから……」

ねりさんはパー公の特技が声帯模写、というところも気になったそうで、他人を観察するのが大好きだった安部公房の「人間コピー機」な性質を受け継いだキャラクターなのかな、と思ったと語る。しばらく聞き役に回っていた加藤さんが、ここで切り込む。

「『（霊媒の話より）題未定』は日本の話ですよ？ あの田舎のモデルは北海道なんでしょう？」

「いや、北海道って土俗的じゃないんですよ……。中国と日本のミックスかな」と、首をかしげるねりさん。「当時は東京から北海道に行くのに鉄道に乗ってずいぶんかかりますからね。途中で見た東北の村のイメージもあるかも」

「“故郷喪失の文学”と言われる安部文学だけど、初期はけっこう故郷を描いてるイメージあるんですよ」と、加藤さん。「“故郷喪失”というキーワードはハイデガーが元になっているのだろうが、安部公房の内部でだんだん後付けされてきたものかもしれない」

と、安部公房の幼少期をめぐって話題は進み、ねりさんは公房の親友・金山時夫について熱心に語り始める。金山は小学生の時に母・ヨリミの紹介によってつきあいが始まった友達で、よく二人で中国人居住区に遊びに行っていたという。

「『箱男』でね、“社会の底辺”とされるホームレスに目を向ける感覚も、すでにこのころからあった気がするんです」

やがて安部公房は東大へ、金山時夫は東工大へと進むが、昭和20年、金山は

幼い許嫁を連れて満州へ帰ることを計画。公房も同行して満州に渡るが金山は結核で死亡してしまうのは『安部公房伝』に書かれた通り。公房は医師である父・浅吉の助手として、各地でコレラの予防注射をして回りながら金山の母親とその許嫁を捜索し、ついに発見。日本へ連れ帰るために尽力したという。

ところで、加藤さんによると、今回出版された『（霊媒の話より）題未定』は、新潮社の提案では『題未定』～『虚妄』までの9作が収録される予定だったそうだ。

「9作だと、ちょうど本の厚さが220ページになるんですって。220ページというのは彼らの経験上、いちばん売れるページ数らしいんだけどさ（笑）」

しかし加藤さんが、『鴉沼』と『キンドル氏とねこ』を収めることを主張、11作品を収録する現行の形となった。

「『鴉沼』はね、公房が奉天を描いた作品を入れたかったんです。そして私は初期作品では『夢の逃亡』と『鴉沼』が断トツで優れていると思っているので、これはみなさんが読めるようにしたいと」

未発表作品がほとんどの今回の作品集で、『鴉沼』だけが雑誌「思潮」に発表済の作品なのだが、その謎は加藤さんの猛プッシュにあったわけだ。安部公房が奉天を明示的に舞台とした作品には、ほかに『異端者の告発』、『友を持つということが（憎悪の負債）』がある。

一方、『キンドル氏とねこ』については、

「『キンドル氏とねこ』は、文体がまたかなり変わって、『S・カルマ氏の犯罪』に近づいているんですね。コモンさんとかカルマ氏という名前も出て来て。『壁』への展開を予告した作品として入れておきたかった」

確かに、この2作が加わることで、新刊『（霊媒の話より）題未定』は安部公房の出発点から、リルケの影響、満州体験の反映、『壁』への予兆、と助走期の作品群が俯瞰して楽しめる構成になった。

「そういえば父は『不思議の国のアリス』をいつ読んだんでしょうね。すごく評価してたけど」

と、『壁』の連想から語り出すねりさん。後で調べたところ、『不思議の国のアリス』という訳題が日本に登場したのは1930年。外国ではジェイムズ・ジョイスやミステリ作家のエラリー・クイーンなど、アリスのモチーフを作品中に散りばめる作家が30年代からいたのだが、日本では戦後かなり経たないと登場しないようだ。ディズニー製作によるアニメ版の日本公開は1953年である。加藤さんも、

「『不思議の国のアリス』を大人が読むようになるのって、1970年前後からですよね。ジル・ドゥルーズが『意味の論理学』でアリスを取り上げたのは1968

年。安部公房はずいぶん早くアリスに注目していたことになります」

そこへ近藤さんから、「戦後、安部公房はそうそうたる画家たちとつきあっていたから、彼らが学んでいたシュルレアリスムの影響もかなりあったのでは……」と発言あり。確かに、『アリス』はテニエルの挿画も含めて、シュルレアリストの聖典とされていた作品だ。おそらく安部公房は「夜の会」に参加していた芸術家たちとの交流を通じて、『不思議の国のアリス』の価値に気づいたのだろう。「夜の会」の中心人物だった花田清輝もまた、この時期のエッセイでよくルイス・キャロルと『不思議の国のアリス』に言及している。

やがて、ねりさんは安部公房がよく語っていたイメージとして、

「『メビウスの輪』と『死の商人』を思い出します。平和の裏側に必ずはびこる『死の商人』のイメージは、50年代に東欧の共産主義国を見て回った体験などが根底にあるのかしら」

これを加藤さんが引き取り、共産党体験などを含めたそれらの思考が、安部公房の「歴史を複眼的に見る」姿勢につながっているのではないかと語る。

「例えば『榎本武揚』です。榎本は実際のところ妙な人物ですが、安部作品の中では、“第三の道”を探して、負けるとわかっている八百長戦争を仕掛ける人物となっている。これはすごく陰謀史観的な解釈ですが、安部公房が本気で榎本をそういう人物ととらえていたのか、それとも陰謀史観をもてあそんでひねり出したひとつの見方なのか、興味はつきないですね。今年の大河ドラマ『八重の桜』では、榎本武揚はどんな描かれ方をするのでしょうか？」

ちなみに『八重の桜』で榎本武揚を演じているのは山口馬木也だが、1980年の大河ドラマ『獅子の時代』では、安部公房スタジオ発足時にメンバーだった新克利が演じていた、ってこれは余談です。

続いてねりさんは、「本当にウマの合った二人だった」と安部公房と三島由紀夫の幸福な交遊関係に触れ、安部公房の友達は右翼が多かったな、とポロリ。さらに、

「『終りし道の標べに』が出た時、推薦人は埴谷雄高、激賞の手紙を送ってきたのは石川淳、最初に批評を書いて褒めたのが三島由紀夫。『S・カルマ氏の犯罪』で芥川賞をもらった時は、川端康成が推してくれました。認めてくれるのは作家ばかりなんですよね、評論家じゃなくて」

と言うと、加藤さんもうなずき、

「評論家は鈍いですね。三島論にくらべると安部論はぜんぜん少ないし……」

なぜ少ないのかと問われて、

「缶切りが見つからないんだと思いますよ。安部公房の文学をどうやって蓋開けていいのか、わからないんです」

「みなさん、（缶切りを）見つけてください」

と、ねりさんの観客への呼びかけで1時間のトークライブは幕となった。

振り返れば、会場には50人前後の観衆でひしめいている。最初から立ちっぱなしの人どころか、遅れて来て場所を見つけられなかった人も多数いたことだろう。主宰者側もここまで集まるとは想定外だったようだ。

現場には、すでに本誌寄稿者である吉田稔美さん、清末浩平さん、今号に執筆している竹知佑輔さんらが集まっていた。Twitterで過去に会話したことのある安部公房クラスタの面々はもっといたかもしれない。『運動体・安部公房』の著者である鳥羽耕史さんも熱心にメモを取っていた。若い人も多く、後方には早い時間から席を取っていた中学生と思しき少年二人組もいた。彼らは親に連れられて来たわけではなく、自らの意志でこの場に駆けつけた安部公房ファンらしい。あの若さで今回のトークを理解しながら聞いていたのなら頼もしいことだ。

しかし、トークライブに来たぐらい感心しては基準が甘い。聞けば清末浩平さんは中学3年生の折、大分から『死霊』を片手に上京、吉祥寺の埴谷雄高邸へ道場破りに赴き、見事対面を果たしたという。さながら柳生石舟斎を訪ねる若き宮本武蔵のようなエピソードではないか。この日客席にいた中学生たちも、いずれユニークな安部公房研究者に、あるいは斬新な手法を打ち出す表現者へと成長し、われわれの前に姿を現すかもしれない（声をかけとけばよかったかなあ？）。

訪れたファン全員が、安部文学に対する新たな「缶切り」の発見を課題と受け取ったことだろう。いや、本誌読者でこのレポートを読んだあなたも、独自の「缶切り」を作成し、安部文学の蓋をこじ開け、さらなる愉しみをひっぱり出していただきたいと思う。（終）

（このトークライブのアーカイブ動画が、紀伊国屋書店からYouTubeやニコニコ動画にいずれUPされると思われます。<http://www.kinokuniya.co.jp/store/Shinjuku-South-Store/20130206163000.html>）



『友達』公演までの道のり

笛井事務所プロデューサー 奥村飛鳥

思えば遠くへ来たもんだ一歌のタイトルのようなのですが、これが今の私の率直な気持ちです。本当に遠く、遠いところへ来ました。10年前には自分が芝居をプロデュースするとは夢にも思いませんでしたが、今現在、実際に公演を35日後に控え、あたふたと準備をする日々を送っています。10年前の2003年、私は仲代達矢氏主宰の無名塾の新生となり、心躍らせながらその入塾式へ向かいました。

到着してみるとオーディションを勝ち抜いたのはたったの7人。ここから私の役者人生が始まるんだ！とキラキラした気持ちで待っていると仲代さんが現れ、突然こう仰ったのです。「これが君たちの不幸の始まりかもしれない」。当時の私には彼が何を意味していたのか理解できませんでしたが、無名塾を離れてようやくその言葉に得心がきました。今の芸能界は舞台役者には厳しく、私は運良くテレビでレポーターの仕事を戴けましたが、大変失礼ながらそれは私にとって何か物足りなく感じられるものでした。どうしたら思い描いていた仕事ができるのか。無名塾の本棚にぎっしり並んでいた芝居の台本が恋しい。悩んでいた矢先、あの大地震が起きたのです。多くの劇場が公演を延期・中止し、中には役者を辞めていく者さえいました。私自身も出演作が中止になり岐路に立たされました。

私はどうするのか。これから何をして生きていくのか。その答えはアメリカ留学でした。そしてこれこそが今回の安部公房「友達」公演企画の始まりだったのです。

私と安部公房作品との出会いはやはり無名塾でした。師であった仲代さんはかつて安部公房スタジオで活動され、日本文学がいかに素晴らしいかを稽古の合間に話してくださいました。故に自然と私も安部公房作品をいつかやりたいと思うようになり、稽古場の本棚でページをめくった「友達」がいつまでも頭の中に残っていたのです。「友達」は英訳本が出版され、アメリカで上演、スウェーデンでは映画化もされました。海外でも評価の高い日本文学—これを海外で、日本語で公演できないだろうか。これが私の最初のアイデアでした。

どうやって公演を打つかはアメリカで情報収集してから考えればいい。

とにかくアメリカへ。しかし問題は私の語学力でした。お恥ずかしいことに

大学の第一外国語は英語だったにも関わらず、当時の私の英語力は中学生にも劣るのではないかというほどのレベルで、渡米生活は決して順風満帆とはいきませんでした。最初の学校はニューヨーク大学の語学学校でした。かの有名なニューヨーク大学の学生証が持てると喜んだのも束の間、すぐにその環境に悩まされることになりました。ニューヨーク大学はコロンビア大学と並ぶニューヨークの有名大学で、その知名度を頼りに韓国から大量の学生が来ていたのです。大学での専攻が政治、特に東アジア方面の政治であった影響で韓国に興味を持ち、渡米以前に韓国留学していた私は当然、韓国語が話せました。そのことを知った韓国人の友人達はたちまち私とは韓国語で話すようになってしまい、英語の勉強はなかなか進みませんでした。

マンハッタンの42stにある少し傾いた小さなアパートで悶々とする日々が続いていたある日、晩御飯を外で食べようと外へ出た途端、急に言いようのない寂しさに襲われ涙がこみ上げてきました。私は何をしているのだろう。この街には人があふれていて、その全ての人が英語を話している。小さな子供だろうが、ホームレスだろうが、物乞いだろうが、皆が英語を話しているというのに私はと言えばアメリカに来て1か月、話せるどころか聞き取りもままならない。皆ができることが何故私にできないのか。もう日本に帰りたい。でも何と言って帰ろう。私を送り出す決心をしてくれた母に申し訳なく、又、何かができる自分自身にも申し訳ない。どうせ諦めるならできることを全部やってみようか。それでもダメならその時諦めよう。藁をも掴む思いで私は家庭教師を探し始めました。

Michael DiGiacomoというその先生はとても陽気で楽しい先生でした。彼が時には時間を超過してまで熱心に教えてくれたおかげで私はようやく思ったことを英語で伝えられるようにまでなり、そのことによってとても貴重な情報をフランス人の友人から仕入れることができました。それは欧米の演劇公演の仕組みです。

欧米ではパトロンと呼ばれるスポンサー、つまり多少でも金銭的に余裕のある方々が芸術に投資するという事は普通のことであり、小さな劇場・劇団に至るまでがそのシステムを利用して公演を打っているというのです。

パトロンがつくからにはその公演をビジネスとして成功させなければならぬので、役者はよりクオリティの高いものを用意しなければならず、又、観客に観に来てもらえるよう努力をしなければなりません。公演後に利子を付けて回収できない団体からはパトロンは去ってしまいます。 難しそうに聞こえます

が、私にはとても理に適っている方法に思えました。赤字の公演に誰も投資してくれないのは当然です。要は良い出し物を用意し、お客様に観に来ていただければいいのです。私にもこれができないだろうか。日本で、この方法で、小劇場で、安部公房が、「友達」ができるはず。今まで頭の中にぼんやりとあったプランはここに来てはつきりとした形になり始めました。

なぜ「友達」だったのか、と今になって人に聞かれることが多いのですが、その理由はいくつかあります。ひとつは勿論、私がああの作風が好きであるということです。主役は“男”ですが、物語は時に主役を置いて侵入してきた家族によって進められます。誰が特別目立って主役という作りでないということで個々のキャラクターの背景が立ち、物語の伝えるメッセージの幅が広がるので、これは役者にとって非常にやりがいのある芝居だと思いました。

二つ目は、この戯曲が1967年に発表されたにも関わらず、そのテーマは今の世の中にも投げかけられる疑問であることです。奇しくも昨年、尼崎で起きた事件は正にこの「友達」を彷彿とさせるものでした。友達とは何なのか。人との繋がりとはどういうものなのか。そしてあの家族は一体どういう集まりだったのか。お笑い芸人の女性が占い師の女性に洗脳されているというニュースも又、「友達」を思わせました。

彼女はなぜ外に出かけられなくなってしまったのか。果たして彼女たちの友情とは何だったのか。よくよく意識してみると街には常に「友達」が潜んでいるのです。

46年前の安部公房さんが世間に投げかけた議論を今、私たちが表現し、伝えていくことは日本人として必要なことなのではという思いがこの公演の実現を大きく後押ししました。

三つ目は「友達」はここ5年程このようなプロデュース公演として上演されていないということでした。養成所の卒業発表や稽古場公演というドメスティックな形では上演されていますが、プロデュース公演はなかなか無く、是非この作品を制作してみたいとも思ったのです。

2011年12月、日本に戻った私は早速動き始めました。まずはパトロン探し。

これは本当に幸運なことに想像したよりも苦労しませんでした。私を長く知っていらして、私と私の芝居に対する想いを信じて下さった方々が資金を貸し出して下さいました。

次は制作を手伝ってくれる人探し。私が最初に当たったのは三村陽美、今回の制作担当です。なぜか最初から制作には三村を、とっていました。彼女は年下ながら落ち着いていて、何事も一生懸命にやる素敵な女性です。彼女が請け負ってくれれば私がニューヨークへ戻っても安心して日本で作業ができると思ったのです。彼女が快く引き受けてくれた

ところで1か月のクリスマス休暇は終わり、私はニューヨークへ戻りました。

ニューヨークではまた新しい生活が待っていました。家庭教師のマイケルの勧めでニューヨーク大学からニューヨーク市立大学Hunter校へ転校したのです。この選択は正しいものでした。Hunterには多くの芸術に精通した教師がいて、彼らは皆、私のプランを応援してくれたのです。後に私がプログラムを修了し完全帰国する際には、ニューヨーク公演をしたいなら学校として協力してもいいとまで言ってくれました。この出会いが私のモチベーションを支えてくれたことは言うまでもありません。

2012年夏休み。一時帰国した私がまずしたことは新潮文庫への電話でした。

安部公房作品の著作権はまだ生きており、上演許可をもらわなければならなかったのですが、先方からの答えは「まず企画書を」。しかし出演者も、小屋も、演出家さえ決まっていない状態でどのような企画書を書けるでしょうか。無い知恵を絞りだし、できるだけ怪しくなく、“ちゃんとして”見えるようにと時間を掛けて企画書を作りました。

やっと新潮文庫にメールで送付したものの、二度目のお返事は○でも×でもなく△。著作権は新潮文庫にはなかったのです。担当の方が連絡先を教えて下さり、安部公房作品の著作権を管理していらっしゃる事務所へ電話したものの、その事務所は三島由紀夫さんや村上春樹さんなど、安部公房さんの他にも大物作家の作品を管理する事務所で、無名の新人プロデューサーには望みの薄そうな大きな門でした。しかし「とりあえず企画書を」と受け付けて下さり、私は若干手直しして企画書を提出しました。待つこと2週間半、新潮文庫に問い合わせた時からカウントすると既に著作権のことだけで約1カ月が過ぎようとしていました。もしかしたら無名の団体になって上演許可を下さらないかもしれない。もし許可が下

りなかったらどうしよう。時間も充分にあるわけではないし、そうなったら著作権のない作品を探してやるしかない。半ば諦めかけた時、遂に待ちに待った回答が届きました。ようやく「友達」の上演許可が下りたのです。2012年7月11日、その日は奇しくも私の32回目の誕生日でした。

ようやく基本材料が整い、次は劇場探しです。100人以上入る小屋で舞台を客席の真ん中に作れる空間、というのが私の条件でした。これは簡単なのではと思いましたが、意外と時間が掛かりました。下北沢周辺の小劇場は皆小さく、100人を超える客席を持つ劇場はまず予算が合わなかったのです。

下北沢・新宿・吉祥寺・笹塚・日暮里・上野・中野・・・とにかくたくさん的小屋をチェックしましたが独特の条件があったり、駅からあまりに遠すぎたり、予算外だったりとなかなかピンとくる場所が見つかりません。

最後に訪れたのが明石スタジオ、今回公演を打つ小屋でした。スタジオタイプの空間を自由に使える劇場。これなら欧米の様に舞台を円形にすることも可能だ。見た瞬間、ここだ！と思い、すぐに契約して私の肩の荷は3分の1下りました。

しかし、やらなければいけないことはまだまだあります。残りの3分の2は演出家と役者です。

最初は若手の演出家を、と思い、俳優座の友人や小劇場で芝居をしている友人たちに誰か良い人がいないか尋ねて回ったものの、反応は決して良いとは言えませんでした。やってもいいよという人が現れても、作品が安部公房の「友達」だと言うと“きよとん”という若者が多く、その反応は私を若干ガッカリさせました。

この演劇的偏差値の低さによって私の中の募集要項は変わり「安部公房作品を知っていてちゃんと読んだことのある人」となったのです。一山超えたとしたらもう次の山だ。なんて遠い道のりなんだろう。私は半ばこの企画が他人事の様思えてきました。本当にできるのか。できたとしても成功するのか。7月後半、あと2週間半でニューヨークに戻らなければなりません。

ある日、私は旧知の友人（といっても彼は私よりはるかに年上ですが）にメールを送りました。正確には愚痴ったのです。細かくは覚えていませんが、演出家が見つからなくて困っているといった内容だったと思います。すると彼の返信にはこうありました。「花組芝居の水下きよし氏と一緒に芝居作りをしてください」。

彼の中では確信があったのでしょうか。橋渡しをしてもらい、私は今回の演出家・水下きよしさんにお会いすることになったのです。二子玉川の駅で水下さんをお待ちしている間、私は既に緊張していました。花組芝居といえばスター劇団です。中学時代の愛読雑誌がSeventeenでもCamcamでもなく“演劇ぶっく”と“シアターガイド”だった私にとって花組芝居の人とは“雑誌に出ていた超スゴい人”なのです。引き受けて下さるだろうか。なんだ、こんな小娘か、なんて思われないうらやまだろうか。そう考え始めると緊張を乗り越えて不安になってきます。しかし「奥村さん？」と声を掛けてきたのは赤いアロハシャツにハーフパンツ、ビーチサンダルという二子玉川には似合わない、湘南・鎌倉あたりにいそうな真夏の洋装のオジサマでした。これは肩透かしです。ビックリしました。カフェに入り、しばらくは自己紹介等カジュアルな会話が続きましたが話が作品に至った途端、彼は鞆から古い、擦り切れた「友達」の単行本を取り出して、作品に対する見解を話し始めました。その話し方は正に演劇人の姿で、文句なしに演出家は決定しました。早速三村に連絡し、キャストイングに移ろうとしたところでタイムアウト。私は再びニューヨークへ戻らなければなりません。あと2学期で私は語学学校のプログラムを修了し、アメリカの大学に入学できるという大切なところだったのです。

キャストイングは芝居の命です。慎重に選ばなければなりません。

ニューヨークに戻った私の生活は、朝から夕方までは学校で勉強し、夕方から夜は宿題をこなし、夜中になったら日本に連絡してキャストイングをするというものでした。寝られない夜もしばしばでしたが、私には出演してもらう俳優に関して強いこだわりがあり、どうしても安易にオーディションを開く気になれなかったのです。そのこだわりとは、老舗劇団の養成機関を出ていること。これはやはり演出家を探していた時の演劇的偏差値に関わる問題でした。

今時役者になりたいという人は数えきれないほどいます。しかし、その人達

の果たして何パーセントが本当に役者になるべく日々弛まぬ努力をしているかは不明です。他人のことを言える立場ではありませんが、本当に最近も勉強も努力もしないのに役者になりたいという人が多いのです。何年か前に知り合いの役者が「飛龍伝をいつかやりたい」と言うので、私が「あの石の話ね」と言うと「石？」という答えが返ってきたことがあります。飛龍伝の飛龍とは石の名前です。そしてストーリーは学生運動時代をベースに描かれています。高校生時代に北区つかこうへい劇団に在籍していた私はこのストーリーを理解するために当然、時代背景を勉強しました。しかし今、その芝居をやりたいという若者は飛龍が石の名前だということすら知らないのです。老舗の劇団出身者ならそれは起こり得ません。彼らは少なくとも3年を養成所で過ごし、古典から現代劇まで学び、自分に役がない時も先輩の芝居を観とり稽古し、厳しい上下関係の中で鍛えられています。そして何より、タレントさんのように華やかでなくても、芝居を続けていきたいという骨のある役者なのです。もちろんそれが全てではありませんが、骨のある若者に集まってほしいと思い、まずは老舗劇団を中心に声掛けしました。今回、男を演じる飯田謙始め、三男役の大澤祐介、末娘役の早稲田真樹は三島由紀夫氏が設立に参加した劇団NLTからの参加、長女役の山本祐梨子は俳優座に所属しています。母親役の槇由紀子さんは文学座出身、次男役の新澤明日は蜷川幸雄氏主宰のさいたまネクスト・シアターでの私の同期です。父親役の桂憲一さんは水下さんと同じ花組芝居の役者さんでテレビ・映画でもご活躍されており、その他の出演者も個性的な面々が集まりました。又、先日行ったオーディションでは役の募集にも関わらず、素晴らしいキャリアを持った方々が参加してくださり、隅々に至るまで隙のないキャスティングとなりました。ニューヨークでの私の寝られない夜はこの素晴らしい結果のためにあったのです。

現在は諸々の準備を終え、役者・スタッフ共に稽古に入るのを待っています。

プロデューサーとしては売り込みや事務作業などまだまだやるべきことが山積みですが、まずは私も一役者として稽古に臨まなければなりません。実はこれが一番の緊張材料です。芝居をする時はなるべく他のことは考えないようにしようと思っています。振り返れば（と言っても振り返るにはまだ早いですが）本当に長い道のりをたくさんの方々に支えて戴きながらここまで来ました。そしていくつかの縁を感じる出来事も起こり、なるべくしてこうなっているのだと思わざるを得ません。著作権事務所から連絡を戴けたのが私の誕生日

だったり、更に私たちの公演初日、3月7日が安部公房さんの御誕生日だったこともきっと何かのご縁なのでしょう。この日が御誕生日であることは実は今年になってから知りました。私はとにかく、芝居のことしか考えていなかったのです。

35日後には幕が開きます。そこで見える景色がどんなものか、今の私には想像できません。ただ、たくさんのお客様と共に、この2年を掛けた公演が、若い俳優の力が、そしてこの作品の持つ力がどのようなものなのか確かめられれば幸いです。皆様のお越しを心よりお待ち申し上げます。

2013年1月31日

笛井事務所 奥村 飛鳥

投稿の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの投稿をお待ちしています。

どうぞ、安部公房の作品を読んで、どんな感想、どんな印象、どんな一行でも構いません。

ご投稿戴ければ、ありがたく存じます。

あなたのどんな言葉も、安部公房という人間を考え、その作品を読むことにつながり、わたしたちの人生の意義を深めることでしょう。

編集部一同、こころからお待ちしております。

連絡先：eiya.iwata@gmail.com

戯曲『友達』稽古場訪問記

編集部 岩田英哉



2013年2月8日（金）14：00少し前に、笛井事務所企画による、安部公房の戯曲「友達」上演のための稽古場を訪ね、2時間の時間を戴いて、役者のみなさんの様子取材致しました。

2011年3月11日の大震災と大津波の後に、日本人が絆という言葉を使い始めた今、尼崎で、この戯曲そっくりな殺人事件の起こった今、そして、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）が隆盛を極めていて、職場の上司がFacebookで「友達」になりたいと言って来るといふ悲喜劇の起きている今、更に今年安部公房の没後20年目になるという記念すべき今、この戯曲を上演することは、深い意義のあることだと思います。

プロデューサーで、同時に次女役をなさる奥村飛鳥さんの上演の方針は、演出上、時代設定の工夫はしても、この脚本から逸脱するというのではなく、できるだけ脚本に忠実な上演をするということです。

企画自体は「海外に日本現代劇を」という奥村さんの思いが始まりでした。なぜ「友達」だったのかという理由は、日本ではなかなか頻繁に公演されなくなってしまった日本現代劇を海外に持ち込んで、そこから新しい勢いを生み出したいという気持ちもあり、また俳優として（奥村さんは次女役もなさる）この戯曲は取り組み甲斐があるという俳優としての欲もありました。又、文体が今風ではないので今の若者の間では広く馴染みのない作品かもしれませんが、実はこれは単

なる作り話ではなく、私たちが日本人であるという特性を持っている限り常に起こり得る事実だということを伝えたいという気持ちもあるとおっしゃっています。

奥村さんが編集部でメールで連絡を下さったのが、1月22日、安部公房の命日でした。そして、話を伺って驚いたことは、公演の初日が3月7日、安部公房の誕生日であったということです。これは、意図したわけではなく、意図せざるが故に、安部公房という芸術家の導きであったかと、思われるのです。

さて、そういうわけで、編集部は、西武新宿線の野方駅近くにある稽古場にお邪魔を致しました。この日が、5回目の稽古の日ということでした。今、役作りと、台詞の読み込み、作り込みをして、脚本を練り上げて、立ち上げようというところです。

14:00丁度に、脚本の読み合わせが始まりました。演出家は、花組芝居の水下きよしさん。

水下さんの合図とともに、即座に、台詞のやりとりが始まりました。それは、主人公の男が、助けを求めて呼んだ、ふたりの警察官、それも年長の警察官とのやりとりの場面でした。

この台詞のやりとりを聞いて数秒もたたないうちに、不気味なものが立ち上って来る感じを抑えることができませんでした。恐ろしい感情が、湧いて来るのです。台詞のやりとりを聴きながら、わたしの感情を分析してみると、それは、まさに他人との意志疎通が全く成り行かないのに、会話をしている不気味さなのだということが気がつきました。

水下さんは、演出家として、実に瞬時に、そして細やかに、安部公房のテキストを読み解き、的確な指示を役者たちに与えます。これに対して、役者のひとは、これも見事なことなのですが、その修正を直ちに理解をして、発声し、声に載せて、修正された感情と意味を表現するのです。率直に、やはり、プロは凄いものだなあというのが、読み合わせが始まって、はや数十分の間に感じたことでした。



ひとりひとりの役者は、自分の出番がなくても、既に役柄になりきって、待機状態にあるということが、その表情からわかります。これも、大変なことだと思います。

また、水下さんが役者の配置を変更し、物理的に、対話をする役柄同士を隣に座らせて台詞を言わせると、途端に役者の声の質が変わり、音調も変わって、水下さんの要求通りの台詞に変貌するということを目の当たりにして、これも、凄いものだと思います。

わたしたちも普段、このようにして生きているのではないのでしょうか。つまり、相手の発声する感情の載ったテキストを瞬時に解釈して、反応して、対等の台詞を相手に返している、ということに気がつく事なく、普段、わたしたちは無意識に演技をしているのではないのでしょうか。そのように思えるのです。

本を読み合わせるということは、それを意識化する作業であるということではないかと思います。それが、冒頭述べた不気味なものが立ち上がるといったように、日常と全然異なった非日常の世界、異界を創造するという不思議。

この臨場感は圧倒的なものがあります。これが、芝居の力なのだと思いました。また、芝居の世界で仕事をするひとたちは、この力に惹かれているのだなと思いました。

休憩時間に水下さんとお話をしましたが、よく安部公房のことをご存じでいらして、思わぬ会話をすることになりました。安部公房がハロルド・ピントーの

『ダム・ウェイター』を自ら訳して、そして上演のときには、いつも『友達』と一緒に上演をしていたということ。そして、曰く、安部公房っておもしろいですよね、友達と絶交しているのに、手紙でやりとりは続けるのですよねとおっしゃて、話は途端に10代の安部公房の話になり、リルケの話になりました。手紙は、リルケからも（そして、母の安部ヨリミからも）教わった、安部公房の生涯に亘る小説の形式でありました。そして、隣人こそは最も遠い存在だというリルケの思考を自分のものにした10代の安部公房の心情を、わたしは、思い出しておりました。

稽古が再開されて、父親の台詞、他人というトンネルを通過して、男のところへ来たんだという台詞を聴いた瞬間に、ああ、そうだ、安部公房は、人間個人を関数だと考えていたのだったなあということ、改めて思い出した次第です。

わたしはほとんどの時間を、目を瞑（つむ）って聞いておりました。役者のみなさんの発声を聞いていると、安部公房が何故脚本を書いたのか、そして書けたのか、その理由を知る事ができました。それは、詩を書く事と何ら変わらないのです。

詩作というものは、最初の一行と次の一行の間に飛躍がなければなりません。単なる時間の中の事象を言葉で羅列しても詩にはなりません。詩作という行為は、その一行と次の一行の間の飛躍に文脈（context）が立ち上がり、立ち現れる文藝なのです。

この一行と一行の飛躍が、脚本の場合は、ひとつの台詞と次の台詞との間の飛躍、即ち、台詞のactionとして、現れるのだという実際の経験を、生まれて初めてして、そう理解した次第です。

実際、『友達』の中には、作者の詩も、長女の歌う詩として、歌われております。

「そして私は夢を見る。遠い遠い、電車のレールのような、夢を見る。満員電車が、レールの上を、逃げてくの。ぎっしりつまった、他人の重さで、火花を散らすの。数えきれない、他人の火花で、私はこんがり焼けてしまうの。天火（オー

ブン)に置き忘れられた、小魚みたいに。」

さて、2時間の稽古を拝見して、その間に感じたことの一部を、上のよう書きましたが、とてもすべてが言葉に直せることではありません。芝居というものの、生きた台詞がどれほど豊かなものか、そうして本当はわたしたちの日常生活もそのように豊かなものである筈なのに、それを言葉によって本当に伝え得ているのか、日常に非日常を意識して、意思疎通ができているのかと考えると、時間は慌ただしく過ぎ去るばかりで、大方のひとは忘れることの連続の中で生きており、言葉も通り一遍に、主人公の男と年長の警察官のやりとりの如くに、表層的で、上っ面の会話ばかりをしているのではないのでしょうか。

さあ、当日、どのような仕上がりになって、素晴らしい舞台が誕生するのか、実に楽しみなことです。

自分自身を知るために、そうして、安部公房の思想の凝縮を経験するために、安部公房のファンであるあなたにも是非、お時間があれば、この公演に足を運んで、劇を観て戴きたいと思います。公演の予定は、次の通りです。一般は、4000円、学生は、3800円です。

1. 3月7日(木) : 19:00
2. 3月8日(金) : 14:00
3. 3月9日(土) : 13:00、18:30
4. 3月10日(日) : 13:00

公演場所は、明石スタジオ。中央線高円寺駅下車徒歩5分。東京都杉並区高円寺南4-10-6

Tel. 03-3316-0400。

アクセスについては、次のURLアドレスをご覧ください。

<http://page.freett.com/AkashiStudio/map.html>

チケットの予約は、次のURLアドレスから。

https://ticket.corich.jp/stage/ticket_apply.php?stage_id=43274

MEMO 「現実生活にあらわれる安部公房現象 1」

～安部公房の発信した情報遺伝子～

滝口健一郎

作家・安部公房は、

日常のありきたりな風景を彼独特の視点で切り取った写真に
言語を合体させた～新たな世界の読み取り～を残している。

(「都市を盗る」全集026 小説「箱男」に収められた写真+文章)

ブログやソーシャルネットワークの世界では、

写真+言語で構成された記事が多く見られる

安部さんが蒔いた種が育ってきたかの如く、

世界の老若男女がいっせいに写真+言語で日々や思いを語りだしたような感がある。

「言語には、なにか、進化を加速させた以上のものがある」

(1994年4月13日NHK・ETVで放映「安部公房が捜しあてた時代(1) 1993・飛ぶ男より」)

の言葉を残した安部遺伝子の尾鰭に吸い寄せられるが如く、

毎日どこかしこのPCやスマホを通して発信される写真+言語のおびただしい量
ノートにペンを走らせ書いていた日記のひとり悶々孤独の愉しみから、

「投稿」画面をクリックするだけで、見知らぬ他人に日記をばら撒くことすら日
常化してしまい……



「安部公房短編集」に見る愛の思想

OKADA HIROSHI

「最後には愛しかないんだよ」

「最後には愛しかないんだよ」という、あまりにも衝撃的な安部公房の言葉を跡づけるために、第3号「安部公房の愛の思想2」では全集第1巻の友人宛て書簡といくつかのエッセイや詩をつぶさに見ていきました。そこでは予想以上に「愛」という言葉が溢れていました。そして友人たちとの交友において現れる「愛」は常に「別離」と背中合わせでした。それも意志的な別離だったのです。さらに注目すべきことは、世界認識において「愛」を、内面と外面の接触するところを「魂と愛の力で」削り落していくもの、としてとらえていることです。いったい、このような哲学をなんと名付けうるのでしょうか。まさに「愛による認識論」「愛を基底に置く存在論」すなわち「愛の哲学」というしかないでしょうが、それは可能であったのでしょうか。この問題については私の課題としてあとに残しておきたいと思います。

もう一つ確認しておくべきことは、「民族愛」のことです。公房は「民族愛」を語る前提として、「一人一人が高い実存的な自己意識をもって」行動すること、を提示していました。すなわち公房の「民族愛」は、個の「実存的な愛」を基に、それを展開していく思考と行動から生まれるもので、それは「世界愛＝人類愛」と同義でつながるものであるはずで、この点はのちに「他者への通路」を追究する上で重要な要素になると思っています。

さてこのあとも全集第1巻のつづきを見ていたところ、先日『（霊媒の話より）題未定—安部公房初期短編集—』が発刊されました。「もぐら通信」創刊号の「安部公房の愛の思想—序論」でもふれたように、安部公房の小説の中に「愛」がどのように描かれているか、いずれ取り組まねばならない課題であったのですが、この初期短編集の刊行を機に、今回この課題を遂行することにしました。

ちなみに序論であげた「安部公房の愛の思想のとらえかた」の三つのレベルと、いうのを再掲しておきます。

- A. 安部公房の少・青年期以来の「愛」の思考を跡づけ、「愛の思想」への高まりをとらえたい。
- B. 各作品を、安部公房の愛の思想をバックボーンとしたものにとらえ、見直してみたい。
- C. 安部公房の「読者への愛」を明瞭化しておきたい。
というもので、今回の試みはB. のレベルにおけるものとなります。

小説の中に「愛」を見るということ

ところで、小説の中に安部公房の「愛」の思想をみる、ということにはいくつかの困難が予想されます。一つには、小説の中で「愛」が語られても、それが作者・安部公房の考えであるとは限らないことです。「レトリック事典」の「愛」の項をいくら見ても、安部公房の愛の思想をとらえたことにはなりません。それらの言葉が安部公房の頭をよぎったことはある、ということにとどまりましょう。ですから取るべき態度は「愛」という言葉にあまりこだわらず、作品全体を見てそのモチーフを考えることが必要だと思います。

もう一つの問題は、よく言われる「作品」と「作者」の関係です。つまり作品を理解するのに作者の背景をどこまで考慮するか、ということですが「愛の思想」を考えるのに、安部公房自身のことを閑却することはできないでしょう。でも出来るだけテキストに即して考えていきたいと思います。（以下、簡便な表記をさせていただきます。）

「（霊媒の話より）題未定」について（1943／3）

まず、この短編集に収められた作品が習作である、という見方には同意できない。最初の作品であるはずのこれが70ページもあるということは、すでに全能力を注いでのものであることを表している。そしてそれゆえにその後の作品は、たとえ短くはあっても習作とはいえないだろう。

さて、この作品の登場人物は、主人公のパー公（夢や幻想を表現していることからすればこれは語り手自身と考えてよい）、その友達のクマ公、それに地主の夫婦、およびその婆さん、ということになるが、注目すべきはこのすべての人物

が基本的に善良な人である、ということだろう。クマ公の主人公に対する愛＝友愛は敬愛というべきもので、この愛は主人公に地主の家に入り込むよう唆すが、それは彼の幸福を望んでのもので、大した悪事とは描かれない。地主の婆さんは口は悪いが彼を家に招く優しい心を持つ。そして地主夫婦は彼を養子にしようとするほど優しく愛情を顕わにする。いずれも他人に対するに愛と信頼をよせる優しい人々である。

ところが主人公だけはそうではないのだ。クマ公にも地主夫婦に対しても「愛」の表出はない。彼の求めるものは「家＝家庭」であって（この点で後の「赤い繭」につながっている）、それはそこにあるはずの「家族の愛」は幻想としてしか想念されていないものであった。満たされない彼が自分の幸福を願う時、それは「自己愛」でしかなかった。

この一方通行の愛の状況は、しかし続くことはない。それは「地主夫婦を欺している」という意識あるいは無意識から、彼は「良心」の呵責にさいなまれるのだ。

ここでは周囲の「愛」に対するに「自己愛」では、その世界は成り立っていないことが表わされている。安部公房はこの作品で「愛の作家」としてスタートしたことは確かである。

「老村長の死（オカチ村物語（一））」について（1945／4）

この作品では一転して、邪悪な人々ばかりのように話が進む。老村長をはじめとして「愛」と信頼に欠けた人々には、疑心と不安ばかりが増幅していく。そしてそのような「愛」の不在の世界も成り立たないことが示されるのだ。その意味では前作と裏表の面を描いていることになるだろう。

これら二作の、世界の成り立ちを「愛」のありようによって構成するところに、安部公房の「内面と外面の接触するところを「魂と愛の力で」削り落していく」作業がなされた、と見ることができる。

「天使」について（1946／11）

最近発見されたばかりのこの作品は、初めて描かれた安部公房らしいシュール

な作品として注目されるが、「愛の思想」の面でも重要な位置を占めている。主人公は精神病院に収容されているが、「外界」に出てそこを天使の国と思い、自分も天使であると信じて道行く人々（天使）に「愛」を振りまいていくのである。ところがこのようなことが出来るには「自分自身が愛に満ちている」ことが前提となっているのだ。

彼、生の天使は何時も未来の扉から、静かに、黙した儘で生の標（しるし）を差出し、微笑（ほほえ）み乍らすぐに消えて行った。何と言う愛だろう。私は涙と共にむさぼり食った。その為に私の胸には、日に日に大（おおい）なる愛が満ち、限りない悦びが訪れて来た。（p99）

このようにその愛は他からの愛によって育まれていくことも描かれている。そして「此の天使の国で私が先ず知った事は、自我と言うものが此处では宇宙の調和的必然性だと言うことだった。」と自我が世界の構成の要素であることが示されるが、当然その自我には「愛」が内包されているだろう。

こうしてこの作品では、前二作に次ぐ「愛の世界」が描かれている。が、この状況も長くは続かない。死の象徴である真紅の花を胸に挿した時から、「小天使」に「お父さん」と叫ばれた時から、「天使の国」は「現実」に引き戻されていくのである。「愛」は永遠でなく、「死」の脅威にさらされている、とも受け取りうるだろう。

（この作品については深く考えさせられることが多いが、今は「愛」についてのみ触れるにとどめる）

以後しばらく、直接に「愛」をテーマにした作品はなくなるので、これら連続した三作をもって「愛の三部作」といってよいように思う。

「虚妄」について（1948／6）

この小説において、「彼女Q」は「僕」の友人Mや夫や他の男たちの間を転々としているふしだらな女として立ち現れる。転々とするにはわけがあり、男たちは結局彼女を追い出すに至るのだ。その事情を十分知らない男たち、また「僕」はその女の危なさにかえって不思議な魅力を感じ、接するや、すぐ手に入れよう

とする。「僕」にも女は意外なほど従順に従ってくる。家に来た彼女は家事など手早くこなす〔当時の女性の役割に不足はない〕。ところが男たちや「僕」はそんなことに頓着なく、直接に性交を求める。それはまったく愛から出た行為でなく、〔自己愛からの〕欲望の対象としての行為である。ところがこの性交は男にとって「まるで自瀆行為をしているような」忌まわしいものでしかなかった。そしてついには彼女を追い出すに至るのである。

ここには「愛」の一欠片もない。彼女もロボットのように従順でありながら、内容のある言葉を表出する事が出来ない。男も高みから突き放すだけで、彼女を引き上げようとか自分が降りていこうとか、コミュニケーションを取る姿勢もなく、追い出す事しかできないのだ。

お互いが求め合うはずの男女の間において、これは「愛の不在」の物語であり、当然に安部公房にとって、成立させがたい世界である。性交さえ、愛を生み出さない不快な行為に描くところは、しごくシュールである。また象徴的にはこの作品は「恋愛の不可能性」を表現していると言えるだろう。

「鴉沼」について（1948／6）

女の結婚前夜（としておく）に再会した男女が、男は愛を求め、女は既定の結婚をやむなく受け入れようとする、まるでメロドラマである。だが事態は暴徒（モップ）の蹂躪によって女も打撃を受け、男は打ち倒され、あげく鴉に片目をついばまれて失明する。女は男を捜し求めて再会するが・・・。

ここでは前作「虚妄」と違って「愛」は男女の両方に十分にある。がそんなことはどうでもよい、というのは言い過ぎに聞こえるだろうが、大事なのは、「愛」についての安部公房の考えがここに表出されていることだ。

こんなになっても世間の絆だとか約束だとかがそんなに強く大事なものののだろうか。いや、そんなことが問題なのじゃない。人間や世界や存在に対する信頼なんだ。悲しみや悦びに対する信頼なんだ。それがどんなに架空なもののものであってもいい。それを自分の未来像に定めること、それが自分に関係している意味を理解しようとする意志……僕は愛を信じてる。（p248）

この表現は、恋を語るものの言葉としては哲学的に過ぎる言い方である。「存在」「意味」「理解」「意志」という言葉から、これは安部公房の思考を表現しているにとらえたい。最後の「僕は愛を信じてる」は安部公房の心からの言明であるとするなら、冒頭にあげた「最後には愛しかないんだよ」という言葉につながるものであり、この間終始安部公房は「愛」を基底に置いていたことになるだろう。さらに

僕らは事実が事実であることをどうすることも出来ないんだ。宇宙に対しても人間に対しても存在に対しても、お前は在ると叫ぶだけなんだ。そしてその情熱がお前に生きた肉を与えていく。仕方がない。未来が手許で崩れ去るのを拒むわけにはいかないんだよ。分かってくれる？ 愛は理解しようとする意志、頭だけでなく、眼で、耳で、指で、唇で、そして全身で。反対に愛されようと慾することは、自分に対する理解の意志なんだ。それは常に同時に存在する。だから人間は愛するという一方的な行為にとどまることが出来ず、初めて自と他を結びつけざるを得なくなる。自愛と他愛が両立しない時、愛は憎しみへと移って行くんだ。(p249) (下線部はもとは傍点)

ここでは実存的な存在論のもとで、「愛することと愛されること」を自己の内面で意志的に深め、外面との境界である身体において実現するべきもの、と表出されている。またこれまで見てきたように、自愛のみからの愛は成立しないことも確認できる。

こうしてこの短編集の「愛の思想」に関する作品を見ていくと、安部公房は「愛」をある状況で描いたかと思うと次作では反対の状況から描き、そうすることを重ねて、全作を通して完成された「愛の思想」が描き出されていることが、わかる。これは驚くべき周到さである。安部公房を「愛の作家」と呼ぶに、今はもうなんら躊躇を感じる必要はないだろう。

「デンドロカカリヤ」の引用の深み

富士原大樹

先日、「デンドロカカリヤ」について書いた卒業論文のための調査の過程で、改めて安部公房は凄い！と思うことができました。タイトルからもわかる通り「デンドロカカリヤ」に用いられている「引用」のことです。今回は、考察には至らず論文には利用できなかったのですが、それらの引用や、テキスト内に見られる、様々な実は特殊な情報について、初出版を元に書かせて頂こうと思います。

まず、タイトルにもなっているデンドロカカリヤという植物についてです。これは李貞熙氏が論じている通り、小笠原諸島に固有な実在する植物です（「安部公房『デンドロカカリヤ』論—または、「極悪の植物」への変形をめぐって」筑波大学日本近代文学会『稿本近代文学』一九号 一九九四年一月）。和名は「ワダンノキ」で、学名である「デンドロカカリヤ・クレピディフォリヤ」は日本語に直すと「極悪の植物」になります。『日本植生誌（10） 沖縄・小笠原』（宮脇昭 至文堂 一九八九年二月）によると「ワダンノキ群集の生育している立地は、風衝性の強いまたはいわゆる雲霧帯の礫地であり、いずれも空中湿度が高いのが特徴であるとも言える」と書かれています。

テキストでのコモン君の変身の場面の描かれ方に注目してみると、最初の変身の場面では、「やはり春先、路は黒々と湿っていた」と描かれており、地面の湿度が高く、湿っていることが分かります。「珈琲舗、カンラン」での変身の日の天気に関しても、「ところで、夜が明けた。一晩中ひどい風雨が窓を打っていたが、晴れていた」と描かれており、これも湿度の高い日です。その後植物化する焼跡についても、「ぼろぼろになってちらかっているスレートや瓦の間から、雑草は生えてくるらしかった」とあり、それが礫地に近い状況であることが分かります。また、デンドロカカリヤについてテキストでは「キクのような葉」と描写されています。キクのような葉とは言い難い形だと指摘している論もありますが、デンドロカカリヤがキク科の植物であることは確かです。それらの点から、テキストでは少なからず意識的に変形する植物をデンドロカカリヤとして描こうとしていたと考えられるでしょう。しかしそう考えると、安部公房がデンドロカカリヤの特徴を詳しく知っていたのだということになります。当時どの程度小笠原の植物について資料があったのか詳しくは分かりませんが、現在調べても詳しい特徴が書かれている資料はあまり多くありません。安部公房が一体どこからそのデンドロカカリヤのことを知ったの

か、ということはかなり興味深いことです。

テキストで「H植物園長」はコモン君に対して「ティミリヤーゼフの植物の生活」を読むように勧めています。これも実在する本です。一九三四年に石井友幸氏の訳で興学会出版部から出版されています。「H植物園長」はそこに書かれている動物と植物の違いについて特に強調していますが、実際にその本の中には以下のような記述があります。

植物と動物との区別は質的なものではなくて、量的なものであるといふ事がいはれる。同一の過程が両界に行われるのであるが、それらの或るものは一方に於て優り、又或るものは他方で優っている

これは「H植物園長」の言葉と一致するものであり、安部公房がこの本で読んでいたであろうことがうかがえます。この実際の書物をあえて利用し、「H植物園長」に語らせることにはどんな意味があったのか、「新しい神話」を「科学的」に描く事にはどんな意味があったのかを考えることで、新たな解釈が見えてくるのではないのでしょうか。

物語にも大きく関わっている『ドゥイノの悲歌』と『神曲』、「ギリシャ神話」についても、実際に読んでみると上手く内容を利用してテキストを書いているのがわかります。例えば、コモン君は図書館で「あたりの人々がいっせいに植物になる」瞬間を体験し、その状況を「地獄だ」と考えていますが、植物に囲まれ「アルピイエ」に監視されるというのは、最後にコモン君が収容される植物園も同じ状況にあると言えるでしょう。このような形で、上手く引用テキストを置き、それを利用して「デンドロカカリヤ」のテキストは構築されています。更にこれらの要素に加えて「ゲーテの原・植物」への言及や、「緑化週間」という言葉と現実の運動とのリンクも、テキスト間の一種の「引用」として読むことができます。これらの文学作品や神話、実際の運動と植物資料、植物学などの引用を詳しく調べ、考察して行けば、まだまだこのテキストの解釈は開かれて行くのではないかと思います。

今回は簡単にしか触れませんでした。卒業論文では『ドゥイノの悲歌』や『神曲』、「ギリシャ神話」についてを中心に考察し、論じています。ここでは、それらの論文内での解釈は挙げずに自分の中でも解釈がつけられなかった部

分や、解釈の広がりそうなくつかの要素について書かせて頂きました。これらの点について指摘のある論や、皆さんの解釈など、様々な指摘があれば更に面白くなるのではと思います。



安部公房—技術と芸術が再会する場所

wlallen

以前、安部の小説を「画期的な文学の新製品」と表現したが、それは安部ほど技術と真正面から向き合い、かつ高度な表現技法を用いて鮮烈な作品を発表し続けた作家は他に見当たらないと思ったからだ。

安部の小説には、『第四間氷期』『人間そっくり』『R62号の発明』『鉛の卵』などのSF作品だけでなく、SF的要素もしくは技術的要素が埋め込まれた作品が多数見受けられる。例えば、『他人の顔』におけるプラスチックの仮面、『箱男』における<<箱の製法>>などが挙げられる。

そして、よく知られたことであるが安部は新製品好きであった。自動車、カメラ、テープレコーダー、シンセサイザー、ワープロなどの新製品が出るや否や、購入してしまったというエピソードには事欠かない。

何故、安部はそこまで技術にこだわったのだろうか？いや、それは適切な質問ではない。むしろ、安部以前の作家たちが技術に無関心過ぎたのではないだろうか？時として、優れた技術はそれ自体芸術であると言われる。また、英語のアートには芸術のほかに技術という意味もある。原始の芸術には道具という技術が不可欠であったことを思えば、技術と芸術が同一の根元から出発したことは決して偶然ではないのだ。

ならば、芸術家が技術に無関心でいる方が理由を求められるのではないだろうか？一部の作家・評論家たちが、安部の小説を文学の本流から外れた異端児と見なし、批判し続けた。しかし、彼らの側から、技術もしくは技術と芸術の結びつきに関する言及はなされただろうか？詰まるところ、それらの多くは、技術に目を向けてこなかった者たちによる近視眼的批判に過ぎないものと思われる。

以上のように、安部の小説世界の根底には、技術と芸術を再会させようという大いなる企みを感じられる。手法に関して言えば何も無いところから出発し、技術の周辺で新たに発生しようとしていた諸問題を芸術の芽として捉え、それらを自らの作品に取り込むことによって、多数の傑作・問題作を発表し続けた安部の着眼点には素晴らしい先見性があり、これこそが世界中において未だ尚新たな読

者を誕生させ続けている安部の小説の力なのだと思う。技術と芸術が再会する場所、安部の小説世界をそのように捉えると、また新たな補助線が一つ引けると思う。

—現代では技術と芸術という二本の枝に別れていたものが、安部の小説世界では一つの球根に融けあっているとしても、驚くことはないだろう。いま以上に迷ったりする気遣いはないのだから。— (* 1)

最後に、カメラについて触れておきたい。安部の死後、デジタルカメラが急速に普及しその影響を受け安部が愛用していた銀塩カメラの市場規模は低下し、老舗のカメラメーカーの中にはカメラ事業そのものから撤退するという現象まで引き起こした。私自身も、銀塩カメラはメンテナンスが大変でとっつきにくいものを感じたが、デジタルカメラは場所もとらず、簡単で気軽に撮れるので愛用している。さて、安部がこの現状を見たら嘆くだろうか？私は、そうは思わない。むしろ、「何だい、それ？面白そうだね、君。僕にも触らせてくれよ。」と言いきそうな気がしてならないのだ。

[注記]

* 1. ” 著者の言葉—『密会』” (安部公房全集 2 6 所収) に対するオマージュ

[wallen, <http://www.geocities.co.jp/Bookend/2459/novel.htm>]



Maecenas pulvinar sagittis enim.

貼りついた未来の皮膚

竹知佑輔

愛読書の作者に会ったことがある、といえは少しは自慢話になるかもしれないが、会ったことがない、というのは少しも自慢の種にはならない。一九九三年といえは、われわれにとって特別な年として記憶されているはずだが、安部公房の世界への入場資格を得たのが彼の死後であった者にとっては、生きているうちに会えたかもしれないというチャンスの喪失を嘆く気持ちも、はじめから抱きようがなかったことになる。

もつとも、種がなくとも、想像することはできる。現に作品を手がかりに、読者の数だけ作者は存在している。いみじくもクンデラが、不滅は永遠の訴訟であると喝破したように、世界にはさまざまな体型をした安部公房が存在しており、たまに顔を合わせれば、友好のしるしに握手をしたり、あの太い腕で殴り合っていたりする。実際、体型の異なる二人の安部公房が、カフェで仲良くしゃべっているのを、この目で見たくらいだ。

イメージには足がある。いかに国土が狭くとも、個人的にこしらえた安部公房が一人くらい闊歩していたところで、誰も気にとめる者はいないだろう。編集部から手渡された一本のチョークで、ここに私なりの安部公房を歩かせなければならない。

安部公房は何よりもまず、既知の告発者として歩きはじめる。「異端者の告発」という言葉は、そのまま安部公房の自己紹介ともいえるだろう。多くの読者が、没後二十年を契機として、それぞれ携えていた安部公房を再検証し、新たな「自己紹介」を試みているが、そこに共通するのは、いかに安部公房がリアリストであったかということに尽きる。

われわれは一つの確実な予知を有している。それは未来の現代人が、この既知の告発者の存在に驚嘆し、同時代に生まれた作家として錯覚している姿にほかならない。安部公房の方法がリアリズムとして受けとられがたいのは、それぞれが一回かぎりの方法だったからにすぎないが、その方法こそが時代の跳躍を裏づけていることを、両時代の現代人はすでに認めてしまっている。石川淳が『壁』の卓抜な序文において、安部公房の描いた壁を、「堅固な物質でできている現実の

壁」だと評しているのは、その一つの傍証となってくれる。

安部公房の用いる現代式解剖台は、どこかで見かけた自走式ベッドのように、縛りつけた読者を颯爽と連れ去っていく。そこで読者は、それぞれの時代につきまとう地獄の見学を強られる。そもそも現実自体が、既成の鏡にくるまれた地獄なのだから、文句を言ってみてもはじまらないが、「裸の王様」の着物が見えるようにと、せっせと常識を織りつづける着物職人たちとの苦闘ぶりは、作者のユーモアで現実的な印象が減殺されることによって、かえって不気味さを露呈させる。たしかに安部公房の読者の表情には、どこかマゾヒストを思わせるものがある。

時代の課題を前にして安部公房がとった行動は、真顔で嘘をつくことだった。だが、嘘つきの天才は、決して自分に対しては嘘をつかなかった。それは同時に、作品の嘘を成立させるための条件でもある。その結果、かえって読者は、その苦闘のしるしを信用の担保にすることで、みずからすすんで騙されることを求めるようになる。自分を欺くことに平気でいられる作家の多さが、安部公房の読者の獲得をうながすことになったのは、皮肉な必然だろう。

このように既知の告発者は、同時に手品師も兼業している。しかし、いうまでもないことだが、ただの手品師とはまるで毛並が異なっている。手品といっても、種のない手品なのだ。たぐいまれな消しゴムの使い手によって、特別に刈りこまれたこれらの手品は、種を明かそうにも、その種がすでに手品それ自体に消化されてしまっている。

手品に種がないという事情は、同時に批評を困難なものにしている。ご存じのとおり、批評と安部作品とは相性が悪い。そもそも、安部公房のみならず、すぐれた作品が作品として機能するのは、まさにそうした批評言語を超えた次元のプロセスが、過程それ自体として提出されるためだけに、方法の徹底によって目指されたものであるからだ。たとえば、『砂の女』は人生をテーマにすえているが、あくまで人生論を拒絶したところに、この傑作を支える仮説の前提があることを忘れてはならない。安部公房は作品が論理の次元から解き放たれ、無限の情報体に変貌するまで、モチーフが発酵するのを徹底して待つ。人生論とは、逆に「裸の王様」の着物が見えるようにするためのものである。

批評言語の次元に引きずり降ろすことなく、それと同時に安部公房の本質を、批評形式によって再創造するという矛盾を背負った批評家の幸運な不幸には、たしかに推して知るべきものがあるが、たとえば同じ日本人である岡本太郎のピカソ論のように、いわば批評自体が創造行為そのものに肉薄しないかぎり、すぐれた批評の機能を回復する見込みはなさそうである。既知の告発者の自己否定精神の影響は、赤の他人でさえ尻込みしてしまうほどだ。

だが、この魂の測量技師から逃れようとしたところで、もはや手遅れである。安部公房の読者には、彼がいたずら顔でこしらえた、特殊な加工で合成された皮膚が貼りついてしまっている。気づいた時点で、すでに施術は完了している。相手が自分自身である以上、無駄な抵抗は通用しそうにない。たとえ作品を破棄したところで、あの笑う月のように、皮膚はどこまでもついてくる。

この皮膚を日常言語の小道具、すなわち鏡を通してにらめっこしたり、手を透かして観察してみたところで、使われたメスが言語である以上、識別することはもはや不可能に等しい。この皮膚に敏感なのは、むしろ他人のほうである。根なし草の証拠を他人から発見される前に、未来の色をした皮膚をみずから視認するには、やはり同じ作者が描いた魂の履歴書を、ふたたび手がかりにするほかない。安部公房は医学を修めたが、国家資格は持たず、医者とは医者でも、専門は魂であった。

因果律の破壊をもくろむ皮下組織が、新たな人間の可能性を求めて、今にも踊り出しそうにうずいている。少なくとも私自身は、この分解不可能な人工皮膚を引き剥がすことを、みずから諦めた一人である。なぜなら、この皮膚が貼りついてるのは、「心臓」にほかならないのだから。



TAP(東京・安部公房・パーティ)ミーティング報告

東京・安部公房・パーティ主宰 しめじ

TAP(東京・安部公房・パーティ)を立ち上げたのは、2006年4月。安部公房について語ることが出来る友人がおらず、当時流行していたソーシャルネットワークワーキングサービスmixi上で、安部公房について語れる仲間を捜そうと思いTAPを作りました。東京と冠している通り、東京近郊で実際に合って話すことを前提としたコミュニティにしました。

6年間で、かれこれ18回に渡りオフ会を開催し、参加者は述べ人数で140人近く集まりました。男女比は、6:4、平均年齢は31~32歳。若い人が多く参加され、それだけ安部公房が根強い人気を誇っていることが実感できました。

オフ会=TAPミーティングと称し、趣旨は、みんなで集まって「ショウチュウを飲んでサカナになる」という非常にゆるい&意味不明な集りとなりました。サカナになる肴はもちろん安部公房の話題。普段、安部公房を語ることができないというフラストレーションが溜まっているのか、みなさん大いに飲み、都会の海を泳ぐように語ります。

唯一の縛りは、必ず一人一冊安部公房のお気に入りの小説を持ってきてもらうことです。自己紹介をしていただく際に、自分の好きな作品について理由を含めて話していただきます。忘れた場合はペナルティとして箱を被ってもらうということをやったときもありました。しかし、中には夏目漱石の三四郎を毎回持ってくるという無鉄砲なシュルレアリストもおりました。

TAPミーティングを重ねるうちに気が付いたのが、「安部公房好きな人の感性のベクトルが合いやすい」ということでした。実際、村上春樹が嫌い、シュルレアリスムが好き、ベースを弾いている人が多い、眼鏡が多い、と言った共通点がありましたし、少しメインストリームを冷めた目で見ると人たちが集まっているため、何か共犯者めいた親近感があり、共感覚がある不思議な場になることが多いです。

試しにTAPミーティングの中で取り上げられた好きな小説、映画について、

以下に列挙してみます。『もぐら通信』の読書様も恐らく、なるほどと思われるのではと思います。

書籍

鉄塔武蔵野線／地下鉄のザジ／バガヴァッド・ギター／風姿花伝／泥棒日記／黒い時計の旅／行旅死亡人／今日の芸術／青い花(レーモン・クノー)／夜と霧／百年の孤独／薔薇の名前／

映画

地下鉄のザジ／雨に唄えば／太陽を盗んだ男／ソダーバーグのソラリス／七人の侍／日本の黒い夏／ざくろの色／火の馬／陽炎座／ニューシネマパラダイス／魚喃キリコ原作のブルー／ルシアン青春／あの頃ペニーレインに／銀座旋風児三部作／蝶の舌／ゴーストワールド／エル・トポ／田園に死す／突撃／ユリシーズの瞳／カルメン／

安部公房の話だけでなく先述した色々な作品群の話をする事で、自分たちの感性を刺激しあえるのが、TAPミーティングの一番の醍醐味だと思っています。

最後に次回のTAPミーティングについての宣伝を差し上げて、結びたいと思います。ぜひご興味のある方は参加いただき、共犯者めいた視線を交わし合いながら、サカナになりましょう。

次回は、2013年3月9日(土)に荻窪にて開催されます。もしお時間のある方は是非とも入らしてください。2月22日現在16名の参加を予定しております。

3月9日(土)17:00より東京近郊の安部公房フリークが集まる、TAP(東京安部公房パーティー)ミーティングを開催いたします。

今回は、数々の有名読書会が繰り広げられた荻窪ベルベットサンをお借りして、読書会を行いたいと思います！

荻窪ベルベットサン <http://www.velvetsun.jp/>

読書会の課題図書は『燃えつきた地図』。失踪した男を追う主人公が、社会、人間、時間の迷路に迷い込み、いつしか進むべき道を喪失していく。不朽の名作として知られた本作。安部公房が読者に向けて問いかけている物は何なのか。いったい何が燃えつきてしまったのか。探していた男はいったい何者だったのか、など、たくさんの問いを持った本作を皆様と一緒に読み解きたいと思います。

TAPミーティングとは、東京近郊に住む方々が安部公房というトピックについて語り合うミーティングの場のことを指します。TAPは「東京・安部公房・パーティー」の頭文字を取ったものです。

安部公房を好きな人とは、感性のベクトルが合いやすいので、実際にあって様々な話をするのが会の趣旨です。

安部公房好きってどこかコンプレックスを抱えてる方が多い気がします。それが共犯者めいた連帯感を生み、それもまた面白いと思い、年に2~4回不定期にて開催しております。ありがたいことに、TAPも今年で8年目。今回の読書会を機会に今後の活動の輪を広げることができればと思っています。

また、今回は、安部公房も生きていたら絶対に実験的に活用していたであろうソーシャルネットワークを活用し、参加者はもちろんのこと、参加されない方からもtwitterにて『燃えつきた地図』の「問い」を募集したいと思います。

twitterから下記のハッシュタグの両方を付けて、投稿してください。
※ハッシュタグとは、特定のトピックであることを明示するため、キーワードの前に「#」を付けてtwitterに投稿する手法

#TAP_MTG #燃えつきた地図読書会

例)

田代君が登場した意味は？ #TAP_MTG #燃えつきた地図読書会

最後に電話している男は探偵なのか？ #TAP_MTG #燃えつきた地図読書会

全てを取り上げることは難しいかもしれませんが、できるだけ多くの「問い」を募集します。

集まった「問い」は会場で取り上げるだけでなく、Web上にてまとめて展開したいと思っております。

今回の読書会についての概要を下記に記載します。

【日時】

3月9日(土)

16:30開場

17:00開始

【場所】

荻窪ベルベットサン

【会費】

1,500円(会場費1,000円+飲み物代500円)

【式次】

開会挨拶

参加者による自己紹介

参加者による課題図書についての感想(ひとり5分程度)

参加者全員で募集した「問い」を考える

閉会挨拶

二次会は付近の飲食店にて行います。

【問い合わせ先】

何かありましたら、下記メールアドレス宛にお問い合わせください。

24時間中に御返事差し上げるようにつとめます。

しめじ

abekoubou55アットマークgmail.com

※「アットマーク」を@に変えて送ってください。

安部公房フリークが集まる絶好の機会、皆で集まり、共犯者めいた笑いを浮かべながら、安部公房について語り合いましょう。(了)

—安部公房に捧げる歌— 睡蓮・作

我が歌を 安部公房に 捧げよう

君の思想を 忘れはせじと

時早し 公房没後 二十年

彼を超えゆく 作家まだなく

孤高なる 小さき宇宙 赤い繭

狂鷲が 終わりし道の 標に居

愛とはと 自問自答す 牧草地

答えは出ずに 翳りゆく部屋

緑色したストッキングの 甘い罨

悪夢から 覚醒したる 夢を見て

名もなき夜の 恐ろしさ知る

汗ばんだ 砂の女と 交ひて

牢獄からの 自由手にする

回転す ユープレッチャの 生き方は

独り閉じたる 植物と似て

友達を装い殺す 闯入者

呼び鈴鳴れど ドアは開けるな

燃えつきた地図を片手に 夏の旅

行方不明になるを憧れ

炎昼にけものたちは故郷をめざす

緑陰に隠れているは 箱男

覗き見すれば 覗き返す目

猛暑日に 読むは第四回氷期

未来を知るは 哀しきことと

焼酎と 水中都市が 避暑地なり

何見たか 誰にも言えぬ 子供部屋

核兵器 方舟に乗せ 彼岸まで

選ばれし者 決めることなく

嘘も真 人間そっくり 異星人

正常異常の 境界線越え

カンガルーノートに記す 異国譚

もぐら感覚 8 : 笑い

タ克蘭ケ

安部公房の笑いは、いつも死と一緒にあって、その笑いは、生と死の境界域に在る笑いとなっています。

安部公房の作品の笑いは、いつも死と裏腹の関係にあって、出て参ります。そして、その笑いの裏には、死の他に、もうひとつ、愛という言葉が隠れています。

『静かに』（全集第1巻、124ページ）という10代の詩に、文字として最初の笑いが、現れます。長い詩ですので、笑いの出て来るところのみを、今、引用致します。

ああ、月が昇った
私は絶望のふちの流れに行きたい
孤独で？ 否、
静かに あんな静かに
誰かが来てはしないか
私はそれを待つてゐよう……。
おお、けれど 予感はもろく はかないものだ、
此の弱い杖は憧憬の重圧を
どうやつて支へ得ようか、
だからマルテの雨が私の眼にもしみるのだ
けれど私は笑はう、
そしてたえられなければ
やつぱり待たう、笑ひ乍ら待たう、

ここで、月が出て来る事が大切なことです。安部公房は『笑う月』という作品を書いておられますし、笑う月に恐怖心を小学生のころから、夢に見て、抱いておられますが、何故月が笑うのか、何故その月が自分を追いかけて来て、恐怖心を抱かせるのかは、この詩と、次に挙げる『笑い』という詩に、とても関係

があります。

この詩に歌われていることは、他の連も合わせて読むと、次のようなことです。

- 1。黄昏ときには、死と別離が、詩の話者を招くということ
- 2 夜になること
- 3。静寂が支配しているということ
- 4。静寂の中で、外部から誰かがやって来ることの期待と予感
- 5。話者は、部屋という空間の内部にいるということ（これは安部公房の主人公達の姿でもあります。）
- 6。その誰かは、「欄間の窓からしのび込んで」来る（欄間という透かし彫りの透明感覚と、窓のモチーフ）
- 7。やって来るのは、友達であるということ。
- 8。友達の愛（有名な戯曲『友達』を早や思わせませす。あの擬似家族の微笑を）と友情を待っているということ
- 9。以上のことに堪えるために、笑いを以て待つとういうこと
- 10。それは、「明い笑ひ」だということ

この詩での笑いは、まだ陰画の笑いにはなっておらず、「明い笑い」と呼ばれていて、友達のやって来る予感に堪え得るための積極的な、陽画の笑いとなっています。従い、友情もまた、陰画とはなっておりません。愛もまた、単純な愛だということができます。

しかし、次に、『無名詩集』に『笑い』という題の詩があります。

詩の完成度は、『静かに』よりも、高いものになっています。

この詩で、陽画の笑いが、初めて、陰画の笑いに変じています。即ち、死と裏腹の笑いです。そして、複雑な陰影を持った、敢えて言えば逆説的な、愛もあります。

じつと噛みしめて
もう二度と笑はなくなつた唇が

細々と語る悦びを私は愛した

誰かが代わりに笑つて呉れるに違ひないと
炎え上る草原と凍りついた都会に
消えて行く蒼白の魂を私は愛した

歴史から解き放たれた心は
笑ひからも逐放される
眠りも浅く泣かねばならぬ

悦びを欲する幸ひの為に
風に洗われた廃疾の路傍で
情熱は絶え 憧れは葬られる

その丘に何時か咲く
感傷の花の為であらうか
否 恐らく花は咲かぬだらう
しかしその廃疾は無駄ではないのだ
やがて世界が笑ふだろう
ささやかなその滅亡の丘に立って
一切を忘れる笑ひが育つだらう

この詩では、笑いは、話者のものではありません。笑いは、世界の所有するものになっています。

それも、話者自身の廃疾になることと引き換えに、世界が笑いを自分のものとするのだという論理です。この場合、廃疾を死と読み替えても、よいでしょう。

歴史から解き放たれた心は
笑ひからも逐放される
眠りも浅く泣かねばならぬ

とありますから、この話者は、時間の外にいるということがわかります。歴史の流れの外にいて、自らの身を廃疾となし、世界の笑い、歴史の笑いから逐放される。

安部公房の初期の短編に『虚妄』という題の短編があります。この短編に、男達の間を、言わば運搬される、笑わぬ女性が出て来ます。この女性は、時間の外にいる、即ち、死とともにある女性です。それが、女性である分だけ、話は、もっとこの詩よりも複雑になっていますけれども、同じ主題を扱った作品だということができるでしょう。

第2連を読むと、既にこのとき、『燃えつきた地図』を連想します。その『燃えつきた地図』の最後の所を引用してみましよう。

車の流れに、妙なよどみがあり、見ると轆（ひ）きつぶされて紙のように薄くなった猫の死骸を、大型トラックまでがよけて通ろうとしているのだった。無意識のうちに、ぼくはその薄っぺらな猫のために、名前をつけてやろうとし、すると、久しぶりに、贅沢な微笑が頬を融かし、顔をほころばせる。

確かに、ここにも、死と笑いが、一緒にあります。

こうして、安部公房の詩を読んで参りますと、詩と小説の間に径庭のないことが、おわかり戴けるのではないのでしょうか。詩と小説の間には、素材、モチーフ、主題という視点からみて、全く連続性があるのです。

さて、わたしの年来の疑問に、何故安部公房は、笑う月の夢を見て、それに恐怖心を小学生のころから抱いていたのだろうかという疑問があります。

今、このように論を進めて来て、その問いに答えようと思います。

安部ねりさんの書かれた『安部公房伝』（216ページ）に、その題も『夜』と題した、小学生の安部公房の書いた詩が載っています。

夜

「クリヌクイ クリヌクイ」
カーテンにうつる月のかげ

カーテンにうつる程の光量を持った月ですから、これは満月なのでしょう。

そして、「クリヌクイ クリヌクイ」という、栗が温いよ、栗が温いよとう栗の売り子の声がカタカナになっていることから、これは日本人ではないのでしょうし、もっと言えば、外界ということから、既に異界からの誘いの不気味な声のようにも聞こえます。

この詩の解釈は、多様にできると思いますが、そのうちの一つは、この異界からの呼びかけの声と、それに対する恐れ of 感情ということは、解釈できるのではないかと思います。

そして、この詩には、既に見て来たように静寂もあります。この静寂は、夜と月の光によってもたらされているものです。冒頭に引用した『静かに』という20歳の時に書いた詩に、何とよく似ていることでしょう。

この詩には、笑いだけが欠けております。笑いが欠けているということから、逆に考えますと、やはり、この詩の話者のところに、いささかの恐怖心があったと理解することは、穿ち過ぎでしょうか。

そして、ここには、窓というモチーフも、初期の安部公房の短編小説ほかの作品にも出て来る反照という言葉も、ここには既にあります。月の反照です。安部公房は、その主人公達も、ものを直接見ることがを何故かせず、いつも窓を通じて、外界の反照をみるのです。

月を、それも皎々たる満月を直視することは、安部公房はできないのです。

安部公房は、対象を直視せず、その周囲、即ち外側、外部を陰画の補集合の

ように考えて、それを内部に流入させ、内部と外部を交換して（これが次元変換）、対象の輪郭のみを思い描き、知ろうとします。

小学生の安部公房が、しかも、夜と題して、このような詩を書いたということは、先見的な、自分の将来を予言するような詩であると、わたしは思います。

安部公房に『笑う月』という題のエッセイ集、或は小説発想集があります。

この中に『笑う月』と題した作品があって、安部公房は小学生のときから、この笑う月が夢に出て来ることを書いています。

たとえば、何度も繰返して見た、いちばんなじみ深い夢は、ぼくの場合、笑う月に追いかけられる夢だ。最初はたしか、小学生の頃だったと思う。恐怖のあまり、しばらくは、夜になって睡らなければならないのが苦痛だったほどだ。（略）最後はたしか十年前だったように思う。かれこれ三十年にわたって、笑う月におびやかされつづけた計算になる。

また、『燃えつきた地図』には、次のように言われています。

杉の柾目（まさめ）をプリントした、ベニヤの天井に、またいつもの顔が現れる……笑っている月……年に二、三度はかならず見る、笑っている満月に追いかけられる夢が、なぜあれほど恐ろしいのか、いくら首をひねってみても、いまもって理解できない謎である……

安部公房が、何故月を恐れたか、それもそれが何故満月であったのかという問いに答えると、次のようになるでしょう。

1. 満月は、夜に出て来る。
2. 安部公房は夜の世界に生きている。
3. 満月は、夜を昼間のように明るく照らす（ここは、安部公房の透明感覚に通じている。自由の感覚、しかし死と共にある感覚。転倒、倒置の感覚。）
4. 窓を通した反照ではなく、直接むき出しに、現れる。（何故

- か、安部公房は、上に述べたように、直視を恐れる。)
- 5。笑いは、境界域にある。昼と夜、生と死、意識と無意識、自己と他者、外面と内面等々。
 - 6。自分の死の代償に、そのような月が、むき出しで笑っている。
 - 7。そのような夜の支配者、体现者が、笑いという境界域を以て、直接何かを、多分死を、死ぬ事を安部公房に訴えかける。安部公房は、それを直視できない。

『笑う月』の中で、安部公房は、次のようにこの夢を分析しています。

おそらく睡りの中で、まず恐怖の生理（原文は傍点）がつくられ、その生理が夢のスクリーンにあの月を投影したに違いない。だが恐怖のイメージが、なぜ笑う月なのか、理由はぼく自身にも分からない。

上のように、詩の分析をして、解釈を試みますと、安部公房が、笑う月の夢を見て感じる恐怖は、むき出しの死に対する恐怖、笑いのもたらす死に対する恐怖です。

この恐怖は、安部公房の創造した作品群の主人公たちが、みな関係する死と笑いと、その恐怖心を克服して手に入れる（ということは、いつも主人公の死を意味していますが）愛とともに、あるのではないのでしょうか。



安部公房の変形能力4：リルケ1

岩田英哉

1. リルケをどうやって変形させたか

安部公房がリルケをどう捉え、変形させたのかは、次のふたつのキーワードによって説明することができます。

- (1) 次元転換
- (2) 存在象徴の統一

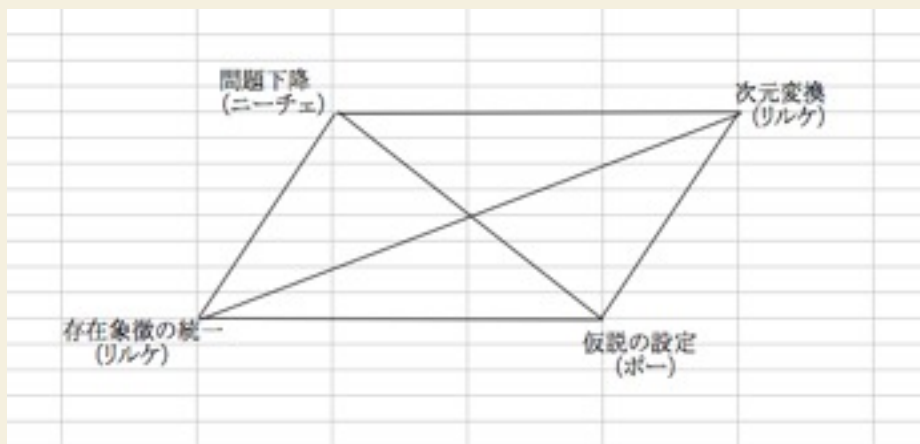
安部公房は、存在象徴という言葉でリルケの世界のすべての要素を概念化し、一言で言い表すことによって、リルケを摂取し、変形させ、自家薬籠中のものとなりました。

安部公房は、リルケを存在象徴の統一という視点から、理解をしたのです。

そして、この存在象徴を統一する方法が、既に最初の回で説明した通り、「詩と詩人（意識と無意識）」で確立した方法、即ち、次元変換です。

これが、次元転換と存在象徴の統一の関係です。前者は後者のための手段、後者は前者のための目的というわけです。

この連載で書いて来た安部公房の変形能力の大切な用語と概念のネットワーク図を作成してまとめますと、次のような襷掛の平行四辺形になります。



これらの4つは、互いに関連して、10代の安部公房の既に完成した世界を形造っており、20代以降の安部公房の総ての作品の基礎となっています。

20歳以降の安部公房の作品は、どの作品も、このネットワーク図の上で、その内側で、また外側で、この構造を基礎において、この基礎の上に、書かれています。（後年の安部公房の話す語彙は異なっても、構造は変わらないという意味です。）

次元変換とは、一言で言いますと、自分自身を含んでの内部と外部の交換ということです。これは、リルケから教わったことですが、しかし、他方、安部公房はその卓越した数学的な能力によって、それ以上のことを独自に考え抜きました。その成果は、20歳のときの論文「詩と詩人（意識と無意識）」に精密に書かれています。

（「詩と詩人（意識と無意識）」については、鷹岩田英哉さんが「18歳、19歳、20歳の安部公房」（もぐら通信第1号から第4号）で詳細に読み解いておりますので、その記事をお読み下さい。）

上の図では、「次元変換（リルケ）」としてありますが、本当をいうと「次元変換（安部公房）」と書いても、おかしくはないのです。しかし、リルケとの関係では、やはり、この次元変換は、内部と外部の交換というリルケに実に特有の表現を以てその詩の中で歌われた抽象的な交換関係ですので、そのように言葉を措いておくことに致します。

もし、小説のみならず、戯曲、エッセイ、その他安部公房の書いた作品のすべてに共通する特徴は何かという問いに答えるとすると、それは、内部と外部の交換であるということに尽きます。

それは、作品の構造は勿論ですが、詳細な細部の生理的な感覚を写した文章に至るまで、安部公房の思考は、この内部と外部の交換ということで、首尾一貫しております。お手元の作品を見てみて下さい。こう言われると、直ぐに、それと気付く箇所が、あちこちにある筈です。

そうやって、読者が気付かない程に、10代の安部公房はリルケを自分のものにしたのです。この限りにおいて、リルケは、小説家に転じた後も、終生安部公房の執筆に影響を与え続けたということになります。

『安部公房の劇場』（ナンシー・シールズ著。新潮社。22ページ）に次の箇所があります。

安部の演劇を理解するのに必要な、安部についての重要なことがいくつかある〔註1〕。

安部は自分を何よりも詩人と見なしていた。一九四七年に、二十歳のころに書いた『無名詩集』と題する小詩集を自費出版した。生涯の後半には、安部の詩作衝動は写真に現れていた。とりわけライナー・マリア・リルケに深い感銘を受けていて、最初のインタビューでリルケを、「詩的なものと反詩的なものとの間で物を見る才能」を具えていると評していた。真知はその後、はにかみ屋の安部がリルケの詩に寄せるこの愛着を語ったのには驚いたと明言した。

〔註2〕

〔註1〕

もうひとつの重要なことは、安部公房の位相幾何学に対する愛着のことです。

〔註2〕

この最初のインタビューは、1973年に行われました。安部公房49歳のときです。

「詩的なものと反詩的なものとの間で物を見る才能」とは、一体何を言っているのでしょうか。

安部公房が詩というときには、常にリルケの詩であり、自分の無名詩集の詩のことです。しかし、ここでは、詩という言葉を使って、詩一般のことを言っています。それに対して、反詩的ということは、その極端にある散文ということを行っている、そう解釈することにしましょう。

そうだとすると、詩と散文の違いはなんでしょうか。一般的に言って、それは、詩の一行は多義的であり、散文の一行は一意的であるということです。詩

的と反詩的とは、そのことを言っていると考えることができます。

リルケの言葉は、そのように性質の異なる詩と散文の、それ以前のそもそもの言葉の生まれる丁度中間から発せられる、リルケは、その中間にあって、どちらの言葉も使うことができるということを言っているのでしょうか。或は、その中間で発せられた言葉が、詩的であり同時に散文的であるということが有り得る、そのような言葉であると言っているのでしょうか。

これは、恰も安部公房が自分自身のことと自分自身の言葉のことを言っているかのようです。そうして、確かにそのことを、詩との関係で、49歳のときに語っている、リルケについての言葉です。

この中間の場所は、次元変換をしたときに生まれる契機のことです。即ち、自分自身を含み、内部と外部を交換するときに生まれる契機、或いは、場所のことです。それは、安部公房が真の実存と考えていた、未分化の状態に自らの身を置くということでもあります。未分化の状態とは、無名の、無知の状態と言い換えても同じです。即ち、安部公房の主人公達がみなひとしなみに身をおいた場所のことです。

同じことを、『没我の地平』と『無名詩集』では、轉身、身転（みが）へ、変容といていたことを憶い出すことにしましょう。ここから話が本題を逸れますが、後年、安部公房が何故、どのようにカフカを称揚し、評価したか、その理由のわかる資料がありますので、『安部公房・荒野の人』（宮西忠正著。菁柿堂。96ページ）から引用します。

＜カフカは甲虫や猿やバケツやをかりて何かを象徴（筆者註：この象徴は一般的な意味での象徴。存在象徴の象徴とは異なります。）しようとしたわけではない。これら一連のメタモルフォゼは何らかのイデエが先立つてそれに随つてなされたわけではない。何よりも先にまづ「轉身」の事実があり轉身した「物」が在る。（中略）彼ははつきりと乾いた眼で物とその変貌をうき彫りにした。＞（『世紀二ユウス』No3。1950年。12月27日発行）

ここにある「転身」という言葉、変貌という言葉が、次元変換の事だということは、お解り戴けると思います。

安部公房の作家と作品を測定し、評価する尺度は、10代のときから終始一貫しています。恐らく、晩年賞賛を惜しまなかったエリアス・カネッティにも同じ次元変換の尺度をあてがって、十分に合格以上と判断したのでしょう。そして、確かに、カネッティの言葉は、その通りの言葉なのです。

さて、それでは、本題に戻って、存在象徴とは何でしょうか。

これを理解するには、安部公房が20歳のときに書いた論文「詩と詩人（意識と無意識）」を読み、理解しなければなりません。

この論文の中に、象徴という言葉の出て来る、次のような箇所があります（全集第1巻。112ー113ページ）。「夜はかくあらしめるものであった。」ということを巡っての、括弧の中に書いた独白の箇所です。ここで、留意すべきことは、

- (1) 象徴は、夜との関係で現れ、言われるということ。
- (2) 象徴を語るときは、表の文ではなく、括弧に入れられて、独白で言われるということ。
- (3) 上記(1)及び(2)のことを、安部公房は、言語とその表現、即ち言葉と文字（テキスト）の問題として捉えていること。

この3つです。

少し長いのですが、以下に引用致します。

（略）<<かくあらしめるもの>>が主観的独断である事に向けられるであろう。<<かく>>とは？<<あらしめる>>とは？<<もの>>とは？しかし此の矢もその射手の自己体験によって難なく地に墜ちるであろう。と言うのは、その体験が単に吾等の夜の体験ではなくして、夜の自己体験の体験であると云う事さえ云

えば十分であろう。現在此の紙の上で行われている多くの展開的葛藤、私の心の中にある仮想の読者との無言の対話、それから現在読んでいられる君の心と仮想の私との論争、懐疑論者の射手、その射た矢、そしてこれから私が書こうとしている事、書いて来た事、かくあらしめるという表現、これ等のもの総てが、〈〈かく〉〉の中に潜入するのだ。そして〈〈あらしめる〉〉もやはり判断としての〈〈かく〉〉の中に押し包まれて終うのではあるが、しかしその〈〈かく〉〉の自己体験として〈〈あらしめる〉〉が体験された場合には、体験的〈〈かく〉〉の生産的法則として、新たなる〈〈かく〉〉の自己表現としてその矢の及ぶ圏外に出るのである。此の〈〈かくあらしめる〉〉は意識され得るものでない事は明らかである。意識とは人間対人間の制約的交流法に他ならぬものである故、此の事は言い代えれば表現不可能であるとも云えるのだ。つまり、夜は此の表現によって対象化されたのではなく、象徴されたに過ぎないのだ。だからこそ此の〈〈もの〉〉に対する矢も当然その効力を失って終わざるを得ないのだ。〈〈もの〉〉は夜自体を指すのではなく、象徴としての表現を意味するに過ぎない。つまり彼の射手の眼にうつった標的は、単に蜃気楼だったのだ。)

この箇所を読んだ後で、次のことを更に付け加えましょう。

(4) 〈〈かくあらしめる〉〉当のもの、即ち夜は、意識することができず、言葉で表現することも出来ず、従い、意識される物は、名前を呼んでも何か実体のあるものではなく、実体のない象徴としてあるということ。(ここに既に、安部公房の言語観、即ち言語機能論、晩年のクレオール論の論拠が確立しております。)

これが、10代の安部公房の考えた、象徴という言葉の意味です。

上の引用した箇所にある夜という言葉、存在という言葉に置き換えれば、存在の象徴、約(つづ)めて、存在象徴という言葉の意味は、自然に理解することができるでしょう。

存在とは、定義される以前の何か、未分化の姿の何かのことです。それは、夜の中に生きています。生といい、生命といい、もし言ってよければ、lifeということから、人生が、といてもいいと、わたしは思います。(実は、わた

したちは、昼だと思っているが、夜の中に生きている。『名もなき夜のために』の主題です。)

そうして、その象徴を統一的にまとめあげ、言葉で表現することを、存在象徴の統一と、安部公房は呼んだのです。

さて、その存在象徴を統一したものは、一体どのようなものになるのでしょうか。

それが、リルケの詩空間です。即ち、時間を捨象して、造形的な空間、構造を具えた空間を造形することです。

(何故リルケが、そのように時間を捨象して、純粋な空間を言語で構築しようとしたかを論ずることは、安部公房論ではなく、リルケ論になってしまいます。しかし、一般的に言えることは、構造的にものを観、構造的に表現しようとする人間は、そのように考えるということです。安部公房も、明らかに、そのような人間の一人です。)

これが、安部公房の求め、願った詩空間であり、文学空間でした。20歳以降に書かれる作品は、小説に限らず、戯曲も、また演技指導の根底にあるニュートラルという考えも、この時間を捨象して空間を、或は時間をすら空間化して、リルケの言葉を使えば純粋な空間を創造することによって成り立つ世界です。

どこかで安部公房は、小説を書く時には、副詞を使わないということを言っています。副詞は時間を表すからでしょう。この典拠を今明示することが出来ませんが、ご存じの方は、ご教示下さい。

もっと言ってしまうと、このように考えた10代のときから終生、安部公房の創作の理想は、言語の構造と作品の構造を一致させることでした。

これを行うためには、時間とは何か、空間とは何か、次元とは何かを、言語との関係で考え抜かねば、行うことができません。それを考え抜いた論文が、

この「詩と詩人（意識と無意識）」というわけです。

『マルテの手記』から、存在象徴の統一について、リルケがマルテの言葉を通じて書いている箇所のひとつを引用します。訳は、望月市恵さん（岩波文庫）です。

（略）詩も書いた。ああ、若くて詩をつくっても、立派な詩はつくれない。詩をつくることを何年も待ち、長い年月、もしかしたら翁になるまで、深みと香とをたくわえて、最後にようやく十行の立派な詩を書くというようにすべきであらう。詩は一般に信じられているように、感情ではないからである。（感情はどうんなに若くても持つことができよう。）しかし、詩は感情ではなくて一経験である。（略）

しかし、思い出を持つだけでは十分ではない。思い出が多くなったら、それを忘れることができなければならない。再び思いでがよみがえるまで気長に静かに待つ辛抱がなくてはならない。思い出だけでは十分ではないからである。思い出が僕たちの中で血となり、眼差しとなり、表情となり、名前を失い、僕たちと区別がなくなったときに、恵まれたまれな瞬間に、一行の詩の最初の言葉が思い出のなかに燦然と現れ浮かび上がるのである。

上に引用したふたつの段落の間に、略したところに、マルテの数々の経験が具体的に書かれています。

ここに書かれていることは、10代の安部公房の、そして20代以降に花の咲いた小説家としての安部公房の創作の方法論（理論）であり、同時に創作の態度（実践）そのものです。

以下に、このマルテの創作の行為をプロセス（工程）として分解すると、次のようになります。

- (1) 多くの経験をする。
- (2) それらの経験を一度忘却する。
- (3) 忘却された経験が再び自分自身のところに戻って来るのを待つ。
- (4) (3)の期間は、経験した思い出が、自分自身の「血となり、眼差しとなり、表情となり、名前を失い、僕たちと区別がなくな」るための時間である。この時間が必要なのだ。
- (5) そして、最後に、「恵まれた瞬間に、一行の詩の最初の言葉が思い出のなかに燦然と現れ浮かび上がる」。

10代の安部公房は、このプロセスと、それから生まれる思い出の形象（これは既に過去という時間を脱している）を、象徴として捉えて、存在の象徴と呼び、その統一を存在象徴の統一（時間を捨象して象徴を空間的に構造化すること）と言ったのです。

さて、安部公房が創造した独自の哲学用語の考察は、ここまでとして、次に、安部公房は、リルケのどういう作品を読んだのかをみてみましょう。

(この稿続く)



感想の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの感想をお待ちしております。

もぐら通信を読んでも、どんな感想でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、もぐら通信に掲載してよいかどうかを付記して下さい。

掲載の許諾を戴いたら、次号に掲載したいと思います。

編集部一同、こころからお待ちしております。

連絡先：eiya.iwata@gmail.com

安部公房の詩を読む 2

鷹岩田英哉

わたしは、前回、このように書きました。

詩を読んで（理解をして）、何をわたしは書けばよいのだろうか。

ふたつの考え方があると思う。ひとつは、安部公房の人生の総体を考えて、その詩が一体安部公房という人と、その人の人生にとって、またその後の諸作品にとって、どのような価値があるかを考える立場。もうひとつは、詩を独立した作品として、それを詩のみとして、その価値を考える立場。

もうひとつの立場があるということに、その後あれこれと考えて思い到りました。それは、歴史的に、通史的に、詩作品の価値を考える立場です。これは、詩史の上で、安部公房のその詩作品は、どのような価値を有するかを考えることになります。

「没我の地平」と「無名詩集」の安部公房は、またそれらの作品は、日本の詩の歴史の上で、どのように考えられるのだろうか。

こう考えてみて、ひとつのことははっきりしています。それは、安部公房の作品は、どれも戦争詩ではないこと、戦争という国家間の戦いや、そのために動員される日本人達、日本人の大人達や青少年達の姿を歌ったものでは、全然ないということです。

むしろそのような政情とは別に、それに背をむけるようにして、リルケに学びながら、思弁的、観念的な静寂の世界、そういう意味では死の世界といってもよい世界に、集中している。

「没我の地平」の二つ目の詩は、次のようなものです。

理性の倦怠

八つの手をもて織りなせる
七つに光る魔の網よ
吾が怖るゝは汝が綾の
無形の夢の誘ひにあらず

沈黙して待てる恐怖の墓
面つゝむ美貌の面紗（きぬ）よ
夕べ渴きに湖辺（うみべ）に走る
吾が獣群を拒むのは誰

おゝ此の涯なしの死の巢ごもり
受動の傷に此の血失せ
昼の轉身（みがへ）に果つる迄
天の没我に息絶ゆる迄

安部公房は、作家として名をなしていた1967年（昭和42年）に、昭和20代に書いた短編集「夢の逃亡」の著者による後書きで、次のように書いています。

リルケというのは私にとって、じつは第二次世界大戦中のシンボルだったのだ。いま考えてみると、あのシンボルが意味しているものは、「死者の平和」だったような気もする。死となれあうために、私が選んだ、死の国への案内図だったのだ。私の戦後は、こんなふうには、まず死のイメージから出発しなければならなかったのである。

第2次世界大戦の戦時下にあって、「問題下降に依る肯定の批判」（1942年。安部公房18歳）や「詩と詩人（意識と無意識）」（1944年。20歳）を書いて理性的に自分の人生を考えていた安部公房は、他方、詩作品という形で、その理論篇を実作によって実践していました。

安部公房の詩の理論からいっても、また当時の時代状況からいっても、10代の終わりから20代の始めにかけての安部公房にとって、現実と理想とは、詩人については前回書いた通りの姿であり、詩作をするということについては、上の詩にある通りの姿であったと思われる。

さて、この詩は何を歌っているのでしょうか。

題名にある通り、理性というものの倦怠の姿を書いています。それは、如何様に書かれているのでしょうか。

八つの手をもて織りなせる
七つに光る魔の網よ
吾が怖るゝは汝が綾の
無形の夢の誘ひにあらず

この第1連がむつかしい。

「八つの手をもて織りなせる 七つに光る魔の網よ」というのが、もう解らない。

これはリルケの形象詩集からの本歌取り、または引用なのでしょうか。

いづれにしても、ここで問題なのは、網であり、それが人間にとって「魔の網」だということです。「汝」は、この網に対する呼び掛け。わたしは、この魔の網を恐ろしいと思っているのでは無いといっている。この網の綾は、「無形の夢」を誘うようである。わたしは、その誘い、誘惑が恐ろしいと思っているのでは無い。それは、いいのだ。そうではなくて、

沈黙して待てる恐怖の墓
面つゝむ美貌の面紗（きぬ）よ
夕べ渴きに湖辺（うみべ）に走る
吾が獣群を拒むのは誰

とあるように、恐ろしいのは、「沈黙して待てる恐怖の墓」である。これを次の連では、「此の涯なしの死の巣ごもり」といつている。

おゝ此の涯なしの死の巣ごもり
受動の傷に此の血失せ
昼の轉身（みがへ）に果つる迄
天の没我に息絶ゆる迄

轉身（みがへ）については、既に理論篇にて説明した通り。これは詩人の技であり、次元変換の努力です。轉身という無私の行為、そういう意味では、没我の行為の果てに見える第3の客観、これを発見することが詩人の仕事です（こう書いてみると、この方法は、安部公房の散文の譬喩（ひゆ）の作文の秘訣であるかのように思われる）。

それを「昼の轉身（みがへ）に果つる迄 天の没我に息絶ゆる迄」といつています。この「世界一内在」と「世界内一在」の次元変換の繰り返し、繰り返す詩人の行為の様子を、「おゝ此の涯なしの死の巣ごもり」と嘆いているのです。

第3の客観、すなわち確たる詩的イメージ、詩的形象を発見できない詩人にとって、それがかなわない限り、詩人のいる場所は、「沈黙して待てる恐怖の墓」です。この墓に入ること、陥ることが、恐ろしいのだと、そう歌っているのです。

それでは、

面つゝむ美貌の面紗（きぬ）よ
夕べ渴きに湖辺（うみべ）に走る
吾が獣群を拒むのは誰

これは、何をいっているのでしょうか。

「面つゝむ美貌の面紗（きぬ）」は、「沈黙して待てる恐怖の墓」の言い換えです。事物の外面を包む、美しいきぬのような言葉があるが、その言葉の指し示す何ものか、これは絶えず逃亡しようとし、その名辞の指し示す固定した範囲を逸脱しようとし、逃れようとする意志のある生物だ。名づけられぬ生物、意志のある夢であり、言語の本質だといっている。それが、獣たちです。

わたしのそのような意志の表出を拒むのは誰か、もしそのような誰かがいるとすると、わたしの恐れるものこそは、そのようなものである。なぜならその誰かにわたしが屈すると、忽ちにして、わたしの行為の場所は、名前だけの墓場になってしまうからだ。そのような墓場を詩人は恐れる。

この詩の第2連を理解するには、後年「夢の逃亡」と題して、昭和20年代に安部公房が書いた短編をまとめた中に、本題となっている作品「夢の逃亡」を読むと、これが、そのまま、名前と意味（安部公房にとって意味は生物であり、生命であり、絶えず動いて生きているものです）の関係で、説明され、形象化され、物語られています。

「夢の逃亡」は、1949年（昭和24年）の作品、安部公房25歳の作品です。「没我の地平」は、1946年、昭和21年、安部公房22歳のときの詩集です。無名詩集は、その一年後の詩集となります。この「理性の倦怠」で歌われたことは、そのまま3年後に、散文に展開されて、物語られているということになります。どうか、「夢の逃亡」を読んでみてはいかがでしょうか。

こうしてみると、「無名詩集」の後から「夢の逃亡」まで、23歳から25歳は、詩文と散文の移行期、混在期ということになります。

さて、題が「理性の倦怠」であるとは、そのような獣達に振り回されるようにして（「受動の傷に此の血失せ」）、しかし尚、第3の客観、すなわち没

私の果てに見えるものを言葉で表現することができるまで（「昼の轉身（みがへ）に果つる迄/天の没我に息絶ゆる迄」）、詩人の繰り返す次元変換、すなわち轉身を「此の涯なしの死の巣ごもり」であることを、既に最初から詩人の理性は読んでおり、知ってしまったという意味と理解することができます。

その仕組みを知っているのになお、知っていて行わねばならぬ、その苦痛と倦怠を歌っているのが、この詩のころだということになります。

こうして考えてくると、第1連、

八つの手をもて織りなせる
七つに光る魔の網よ
吾が怖るゝは汝が綾の
無形の夢の誘ひにあらず

この連は、確かに、詩人の恐れるものは、魔の網の綾が美しく誘う無形の夢などではないということがわかります。無形の夢こそ獣達であり、それは詩人の恐れるものではなく、むしろ求めるものであるからです。

安部公房は、この「理性の倦怠」を、無名詩集では、「倦怠」と改題して、次のように詩も改作して、歌っています。

倦怠

蜘蛛よ
心の様にお前の全身が輝く時
夢は無形の中に網を張る
おゝ死の綾織よ
涯しない巣ごもりの中でお前は幻覚する
渴して湖辺（うみべ）に走る一群のけだものを

「八つの手をもて織りなせる/七つに光る魔の網よ」というような難しい表現はなくなっています。その代わり、蜘蛛がこの網の主人公となっています。

この詩を読むと、この倦怠という題のもとに歌われた蜘蛛とは、ほとんどその後の安部公房の小説の主人公の意識であるかのように見えます。

さて、「没我の地平」と「無名詩集」の間は、1年間ではありますが、このように、前者の作品が、後者の作品に継承的に反映されているばかりでなく、詩としても一層洗練され、そうして安部公房自身が自分自身の表現を獲得していると考えることができます。これが前者と後者の関係の一部ではないでしょうか。

以上、「詩と詩人（意識と無意識）」を読み解いた知識で、安部公房の詩を、このように一層深く、その意味を読みとることができました。

安部公房の詩とそこに使われる言葉の意味を知るためには、この論文の理解が必須です。

さて、そうして、もうひとり、リルケという詩人がおります。「理性の倦怠」に出て来る獣という言葉と形象も、リルケの「マルテの手記」の中に出て参ります。

リルケから安部公房がどのような素材を学んだかについては、岩田英哉さんの連載の「安部公房の変形能力：リルケ」篇にお任せすることにします。

そうして、安部公房の詩については、以後場所を移して、ブログ「安部公房の広場」にて論じたいと思います。

「もぐら通信」を読んで

ロータス

最近、ジャック・デリダ『アデュー エマニュエル・レヴィナスへ』を再読した。再読とはいっても内容を殆ど忘れていたので初めて読んだときと同じような衝撃を受けた。アデューをデリダはさよならの意味で使っていない。「アデュー」[神の御許に]と注釈している。

デリダがレヴィナスについて語ったこと、それは「レヴィナスの思想を絶えず思考しなおし、その思想を何度も何度も再発見しては始めなおす」必要性、「レヴィナスを呼び戻し、その非応答に私たちの中で私たちの心の奥底で、彼が応答する」のを待つことであり、それが<問い-祈り>に他ならないことである。

だが、この本が日本で翻訳され発行されたその年にデリダも彼岸へ旅立った。訳者はあとがきでこう書いている。

「生はつねにすでに死をはらんだ生き残りであり、遺言であり、生ある者（生き残り）は遺産相続のかたちで、つねにすでに他人に、世界に、すべてに応答責任を負っているのだから、いまさらデリダの肉体の死が事態を変えるわけではない、と言うこともできるかもしれない。

しかし、たとえ作者の生の随伴が、エクリチュール機能の条件である構造的な死からすれば偶発的なものだとしても、その偶発的な一個の天才的存在の唯物的な死は、まさにそうした死の構造を抉り出したエクリチュールの、新たな生産の可能性も永遠に失わせたのだということは認めざるをえない。

新たな言葉、新たなテキスト、新たな連辞によるデリダからの新たな呼びかけは、もはや到来しない。残された私たちは、文字どおり残存（残留）する彼の痕跡、生き残ったテキストをもとに、私たちの手で彼のテキストを読み替え、書き換えていくしかない。」

私はデリダがレヴィナスに行き、訳者がデリダについて記したことを安部公房について行いたいと考えている。安部公房はインタビューの中で「自分の作品を解説するのはこれからの批評家の仕事だ」と言っていた。だが安部公房の

作品は十分に解説されてはいない。型どおりの文句で片付けられているだけだ。それは安部公房にとっても彼の読者にとっても大きな不幸だ。

だから私は死ぬまでに全力を投じて安部公房論を書こうとしている。大学の卒論をベースに、彼が何を見たかを解釈しようと思う。そしてそのテキストが柄谷行人『漱石論集成』のような強度を持った批評・論になること。それが私の願いの一つだ。私の目にするもの全ては安部公房に通じている。漱石にも思い入れはあるが、漱石論はたくさんの批評家が書いているし、そこに私が付け加えることも特にない。だが安部公房論だけはどの論を読んでも納得できない。ならば自分で一番納得できる安部公房論を書いてしまえという境地に至ったわけである。

しかしその思いは「もぐら通信」を読んで改められた。「もぐら通信」の著者たちは安部公房に真摯に向き合い、彼の作品や人生を様々な角度から丁寧に読み解いている。安部公房に真っ向から向き合い、彼の歩んだ軌跡をファンだけでなくまだ彼を知らない者へも彼の作品の持つ豊饒さや生きざまを、ときにはユーモアも交えて伝えようとしている。いわば見知らぬ読者への手紙を書いているのだ。手紙、それはデリダの哲学の根底に置かれている思想である。いつ届くかわからない、もしかしたら届かないかもしれない”手紙”を著者たちは書き続けていると言ってよいだろう。そのことは「もぐら通信」という冊子のタイトルからも読み取れる。この通信を誰ともわからない読者へと届けようとする姿勢は安部公房への「愛」がなせる業だ。この「愛」は数多の批評家や評論家が論ずるのとは全く別の位相を成している。そこに私は感動し、安部公房に対する熱き思いを新たにした。この「愛」がこれからもっと多くの方に伝わることを願ってやまない。そしていつか自分も「もぐら通信」で安部公房について書くことが出来たら幸いである。

漱石と安部公房にあるのは存在の根源的不安だ。漱石は両親に育てられておらず、安部公房は満州で生まれたために日本を祖国だと思えない。換言すれば二人とも根なし草なのだ。それが「私は何者なのか?」「私はここにいていいのか?」という不安を引き起こしている。言葉にならない孤独、それを彼らは小説にした。

安部公房の孤独を解説することは安部公房と孤独を分かち合うことだ。漱石

論を書いた柄谷行人は漱石とそれを行った。安部公房を論じる人はいても彼の「孤独」を救い出した人は今のところ皆無に等しい。隠された「孤独」に耳を澄ますこと。私はそこから出発したい。

たとえば村上春樹はわかりやすい。彼を書く「孤独」はわかりやすい。だから万人受けする。でも私は彼の描き出す心象を「孤独」とは思わない。屈折したナルシシズムを抱えた”僕”と犠牲（人身御供）にされる”女”。それだけの話だ。

安部公房論を書くことは自分を救うことと同義だ。私が安部公房に惹かれ続けているのは彼の「疎外感」「孤独」と「＜他者＞とのコミュニケーションは可能か」という命題にある。それを解明することで私の中のそれらも昇華されることだろう。

<http://twitter.com/Nymphaea>

（編集部註：最後の二文字は、半角のアンダーバー2つです。）



読者からの感想

もぐら通信を発行していて、読者の方からの感想ほど、うれしいものはありません。以下に転載して、もぐら通信の読者のみなさんにも、ご覧戴きたく思います。メール配信担当：岡篤史 (w1allen)

大田有紀様

毎月もぐら通信の配信を楽しみにしております。

死後二十年が経ち、安部公房さんを知らない若者も増えてきた今だからこそ、安部公房さんの魅力を多くの人々に伝えられる配信になることを期待しております。

編集部の皆様につきましては、寒風が身に染みる季節ですので、御身体にはご自愛ください。

桐原正二様

もぐら通信第5号、お送りいただきありがとうございます。

今回もさらにヴォリューム・アップですね！

これからどんな風にもぐら通信の世界が広がっていくのか、とても楽しみです。

今回も楽しくじっくりと読ませていただきます。

倉田真理様

毎日新聞で知りました。

一昨年から、生きておられたら、今、この時代をどう語るだろうかと気になって、昔読んだ安部公房を少しずつ読み直していました。

いろんな方の「安部公房」に触れられるのを楽しみにしています。

けんけん様

こんばんは

最新号ありがとうございます

そして、編集お疲れ様です

最近、もぐら通信の事を知ったので創刊号より拝読させていただいております

もう四半世紀も昔のことですが、はたちそこそこで安部公房の作品に出会い、意味はよくわからなかったのですが、読了後の心地よさにすっかりはまってしまい新潮の文庫本を読み漁ってました。

昨年末から再読していたおり、もぐら通信の事をしり登録させていただきました
よろしくお願いいいたします。

安部公房の作品との出会いは本当に衝撃的でした。

社会人になったばかりで社会の『斯く在る』に翻弄されていたときに
会社のもぐらな先輩(今思えばですが)から薦められたのがきっかけでした。
それ以来、自分自身の『斯く在る』で生きられるようになりましたね。
それによってもたらされる結果が良くても、悪くても受け容れられる
ように、というよりは結果を楽しめるようになりました。

滝口健一郎様
岡さま

「もぐら通信 5号」受領いたしました。ありがとうございます。
研究していると書きましたのは個人的にです。

安部氏は

「書きたい」衝動を喚起させてくれる作家です。

「スプーンを曲げる少年」の再読を重ね、
未完に終わった「飛ぶ男」について想いを巡らせております。
とにかく、書かなければならないので、安部文学は必需の言語群として認識して
おります。
よろしくおねがいします。



【合評会】

第5号の合評会を2月10日から、ヤフーtextream「安部公房」トピで開催しました。
<http://textream.yahoo.co.jp/message/1000004/0bit8xkbc?page=1&sort=d&feel=99c>
第6号の合評会も同様に行いますので、読者の参加をお待ちしています。

【本誌の主な献呈送付先】

本誌の趣旨を広く各界にご理解いただくために、安部公房縁りの方、学者研究者の方などに僭越ながら本誌をお届けしました。ご高覧いただけたらありがたく存じます。（順不同）

安部ねり様、渡辺三子様、近藤一弥様、池田龍雄様、ドナルド・キーン様、大江健三郎様、辻井喬様、宮西忠正様、三浦雅士様、鳥羽耕史様、加藤弘一様、友田義行様、内藤由直様、番場寛様、田中裕之様、坂堅太様、ヤマザキマリ様、小島秀夫様、頭木弘樹様、高旗浩志様、円城塔様、藤沢美由紀様（毎日新聞社）、富田武子様（岩波書店）、安部公房文学室様、日本近代文学館様、全国文学館協議会様、新潮社様など

この他に献呈をさせて戴くべき方がありましたら、ご推薦をお願い致します。

【ご感想、お励ましをいただいた方々】

読者の感想ページにあげた方々以外にも次の方々から感想やお励ましなどのコメントをいただきました。厚くお礼申し上げます。

吉田稔美様、宮西忠正様、高旗浩志様、毎日新聞・藤沢美由紀様、岩波書店・富田武子様、池田龍雄様 他

またTwitterでも次の方々から感想などのコメントをいただいています。

巽孝之様@t2tatsumi、rikic様@rikic、モナド様@monado_itself、やつそ様@yasol19

【もぐら通信の編集方針】

1. われらは安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものである。
2. われらは安部公房という人間とその思想およびその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものである。
3. われらは安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものである。
4. われら自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うこととする。

【もぐら通信のバックナンバー】

もぐら通信のバックナンバーは、安部公房解説工房blogの以下のURLアドレスからダウンロードすることができます。

<http://w1allen.seesaa.net/category/14587884-1.html>

編集者短信

もぐら通信の編集者は何をしているのか？

ちょっと“けったいな”資料を落手した。それは1954年というから、今から60年近く前のものということになる。アサヒグラフの「厨房の殿方」という頁で5人の男性の「ご自慢料理」が紹介されていて、安部公房さんのものも載っている。彼のご自慢料理はギョウザという。「うどん粉に少し澱粉をまぜるといい 中味にはラードを少し入れて」と解説もかなりのもの、と紹介されている。写真にはランニングシャツ姿でギョウザを作っているところとその完成品。彼の頭にはベレー帽のようなキャップ、それに黒縁メガネ姿である。公房さんは瀋陽育ちで中華料理が得意で、真知夫人が遅く帰った時、豪華な中華料理を作っていて驚かせたが、ご飯を忘れていた、という(笑)。この資料は全集の参考文献に載っていないのが自慢。公房さんの下には岡本太郎氏の姿が。料理はなんと「ダッタン人のピフテキ」、おいしそう。
[OKADA HIROSHI]



今号は、テレビゲームの話です。PS vitaの最大1万円の値下げと次世代機Playstation4の発表がありました。もっとも、私の好きなゲームは、アドベンチャーゲームやアクションゲームで、それほど性能を要するゲームではないことが多いので、飛びつくことはないと思います。

今、ハマっているのが、「ゼルダの伝説 大地の汽笛」です。前作「ゼルダの伝説 夢幻の砂時計」が良かったので買いましたが、期待を裏切らない出来です。特色はなんといっても、タッチペンとマイクだけで、すべての操作を行う点でしょう。ニンテンドーDSの特徴とはいえ、本当にこれだけでゲームを作ってしまったのにはビックリしました。それでいて、ゲームの面白さはいささかも奪われていないどころか、数倍面白い出来になっています。ニンテンドーDSをお持ちの方なら、1作千円以内で買えますので、お勧めします。

[wlallen]



この2週間というもの風邪がなおらず、2月20日の安部ねりさんと加藤弘一さんの紀伊国屋でのトークライブに行く事ができなかった。司会の近藤一弥さんにも、おふたりにも、ご寄稿と日頃のご愛顧の御礼を申し上げたいと思っていたのに、誠に残念なことでした。しかし、わたしの思いが天に通ずれば、必ず再度安部公房の未発表原稿が発見される筈です。その機を楽しみに待ちつつ編集をすることに致します。

[タ克蘭ケ]



編集後記

今月号も、力作のご寄稿を戴きました。この場を借りて、ご寄稿戴いたみなさんに、御礼を申し上げます。

関東側でのTAP、そして関西側での関西安部公房オフ会と、ふたつの東西の安部公房ファンのコミュニティ主宰による読書会が、奇しくも同じ『燃えつきた地図』を課題の図書として、3月に開催されます。

このふたつのコミュニティが、相互の交流をすることができたらいいなあと思っております。

もぐら通信が少しずつ、そのような役割を果たし始めているのではないだろうかという予感があります。

夏にどこか中間地点で合宿のようなものをやるというアイデアはどうでしょうか。と、考えるだけでも楽しいことです。

安部公房の広場

連絡先: eiya.iwata@gmail.com

差出人:

安部公房の広場

〒182-0003 東京都調布市若

次号の予告

次号では、次の記事を予定しています。

1. 安部公房の都市論（愛の思想）：OKADA HIROSHI
2. 続 安部公房の写真：marmotbaby
3. もぐら感覚9：かいわれ大根：タクランケ
4. 安部公房の変形能力5：リルケ2：岩田英哉
5. その他のご寄稿